LA REVUO ORIENTA

9 3 7

ARO XVIII

I - R O 1 2

DECEMBRO



APANA ESPERANTO-INSTITUTO

LA REVUO ORIENTA 目次 (Enhavo) JARO XVIII, N-RO 12



エスペラント發表第五十周年記念
第二十五回日本エスペラント大會

LA REVUO ORIENTA

Jaro XVIII N-ro 12

Decembro 1937

NACIA GAZETO の使命

——學會發行の兩誌併合に當りて——

K. Ossaka.

1887年十二月ザメンホフ博士が我がエスペラントの最初の小册子を發行して玆に滿五十年。新妻の父親の好意ある出資でこの小册子の自費出版だけは出來たものゝ、何等の後援も社會的地位もない、宣傳の資は愚か日々の生活すらも未だ立て得なかつた此の一靑年が半世紀の後エスペラントが今日の如く歐米は勿論、極東の日本にさへ力强い運動が繼續されるであらうとは夢想だにもしなかつた事であらう、さう考へれば國際語エスペラントの發達はすばらしいものと云へる。然し乍ら今日あるは各國の有識の士が獻身的努力を致した賜で、就中世の冷笑惡罵と闘はねばならなかつた最初の四半世紀に於ける惡戰苦闘は感激に堪えぬ。とは云へエスペラントの現狀はなほなほ普及の過程を脫したとは云へない。此等先人の前半世紀に方ける報ひられざる刻苦に對して更に一層不撓不斷の努力を繼承することは來るべき半世紀に於ける吾人の義務であらねばならぬ。只異るべきは個人的の努力が組織化されて來た機運を承けて、將來吾人は益々吾が運動の組織化を徹底し、吾人の運動の合理化、努力の經濟化を圖らねばならぬ點にある。

團結は力である。地方の孤立せるエスペランチストは先づ己の四周に働きかけて grupiĝi せねばならぬ。地方會 (lokaj societoj) は各その國の landa asocio を支援し、各國の landaj asocioj は小異を捨てゝ Internacia Esperanto-Ligo の傘下に集結して Ligo をして全世界に於ける眞の運動中心となる樣守り立てねばならない。

今日エスペラント運動の最も重要なる心核は各國の landa asocio である。その經營の健全なるか否かは實にその國のエスペラント運動の消長に關係し、ひいては世界の運動にも影響を與へる。隣邦支那に於けるエスペラント運動が更に發達せざるは一に大同團結が行はれず、健全なる landa asocio を建設する努力が拂はれず、組織の經營良しきを得ざるためである。

何事もさうであるがエスペラント運動も世界に於ても、機運時勢に依て左右され、levi され skui され、浮沈あるは免かれない。一國の運動の統率者たるべき landa asocio は波濤に押さるゝ事なく、渦中に卷き込まるゝ事なく、或は時流に棹さし、或は沈滯に船もやひして巧に梶を取つて進まねばならない。己の力を充分に知つて流れを見、時をはからねばならない。

現下の狀勢は遺憾乍ら順風に帆する時相でない。國際的不安、爲替關係の異狀等のため我國國際語運動が staro に逢着してゐる事實とは本誌本年三月號會計報告に於て見らるゝ如く大減收となつて、よく表現されてゐる。吾人は此の非常時に際して一大勇猛心を以て事業の繰短を行ひ、吾人の傳統たる運動中心機關の健實性を擁護せねばならないのであつた。(前學會書記長岡本好次氏は殊にこの點を深憂され、苦慮せられた) エスペラント後援會を設けて宣傳普及

の補强策を講じたのも此の爲めである。去る8月23日學會役員會に於て人力經費の合理化が議せられ、來年度に於て本會發行の兩雜誌を合倂することを考慮することが決定せられた。まことに遺憾の極みてあるが、我國に於けるエスペラント運動の健全性の擁護上に心要にして、且つ時勢に順應する方策として止むを得ざる所である。經費の上からのみならず岡本書記長退職による手不足の上からも學會日常業務遂行上必要となつた次第である。然し乍ら形の上では兩誌の一つを廢刊したのでなく、合體發行するもので、暫らくよりよき時勢を迎へるまでの經費人力の合理化として忍んで頂きたいのである。卽ち合體誌は『エスペラント』として店頭に出でゝ街上宣傳の務を續け、La Revuo Orienta として運動統括の任をも果たすこととなる。

エスペラントの雜誌は大別すれば (1) Intnrnaciaj gazetoj と、(2) Naciaj gazetoj となる。(1) はエスペラントを利用し、その實用的價値を培ふもので一國の事項に偏せず勿論全部エスペラントで編輯さるべきものである。これには Heroldo de Esperanto, Esperanto Internacia 等一般向のものと、Literatura Mondo, Bulteno de Internacia Scienca Asocio Esperantista, Interligilo de Poŝt-Telegraf-Telefonistaj 等專門的なものとある。(2) は各國に於てエスペラントを普及するためのもので、當然主としてその國語で編輯され、エスペランチストの數を增加すべき宣傳記事(報道を含む)と質を高むべき學習並にエス文の興味記事を給すべきものである。現在に於て (1) は甚だしくその經營困難で、存續刊行は不安な實狀にある。これは世界に於けるエスペラント運動が未だ隆盛でない事を語るもので、なほ更 (2) の健闘が必要とせられる次第であり、その經營者は心してその使命の遂行を誤らざる樣努力すべきである。たまたま海外の一二の國に於て指導者が自己滿足の愚さから naciaj gazetoj にしてエスペラントの記事を滿載してその使命を誤つたものもあつた。かくては國內普及の實を擧げ得ざるのみならず、さなきだに刊行に四苦八苦してゐる internaciaj gazetoj の競爭者として之を益々危怡に陷れる不合理を敢てするものである(フキンランドの機關誌の國際化し、暫くにして廢刊の止むなきに至り、國內の運動が衰徵したのは好例)。

我が學會の二雜誌はその餘力あつた時代一は初等、一は高程度と云ふ分界の下に naciaj gazetoj としての使命を果して來たのであるが、合理化による合倂後に於ても此の nacia gazeto としての方針は不動であるべきで、たゞ難易の配合は會員の大多數が初學者たる我國の現狀に鑑み易に從ふべきものであると思ふ。この點後進扶掖の溫情を以て先輩大家の讀者は寬恕せられむことを希ふ次第である。

尺蠖の伸びんとするや先づ屈す——願くば各地會員の一層の活動と支援とにより此の經濟的困難なる時局を切り拔けて運動の合理化の爲めに再び雜誌を初中高と分業發刊し得る時の一日も早く來らんことを希望して止まぬ次第である。

エスペラント發展の爲調査事業計畫化の必要に就いて

I. U.

着實に事業を遂行する爲には、よく自己の力と相手の事情とを知る事が必要だ。その爲に調査の價値があらゆる機會に感ぜられる。

既になされた主要なる調査(括弧內は調查者):——

（1） エス譯日本文學文獻（學會）
（2） エス文日本科學文獻（學會）
（3） エスペラントに關するラヂオ放送（學會）
（4） 學校に於けるエスペラント（岡本氏）（未發表）
（5） エスペラント地方會出版物（宮崎エス會）
（6） エスペラント關係新聞記事（學會）
（7） 衆議院議員候補者のエスペラントに對する意見（後援會）
（8） 全國各圖書館のエスペラント藏書數（婦人聯盟）
（9） 日本のザ博關係文獻（ザ博尊重聲明起草委員會）
（10） エスペラント名商品（淺草エス會）（未）
（11） エスペラント名登錄商標（吉田太市氏）
（12） スポーツ用語（岡本氏）
（13） エスペラント學習動機（淺草エス會）
（14） 商業關係エスペラント語彙（進藤氏）（未）

（語學研究上の調査はこゝに省いた）

發表されたものは如何に有益かは何人も認める。未發表のもの及十分普及してゐないものも少くない。調査者は學會、地方會、專門團體、個人等多樣に亘つてゐる。更に廣汎に各方面で實行されることが望ましいが、發表普及の方法が一層集中合理化され、入手利用の便が高められたい。

今後なるべく速やかに實現されたい調査事項：——

A. エスペラント事業內部の諸事項

（1） エスペランチストの職業及特殊關係方面、（今後各人の社會機能と結び附けエスペラントを發展せしむる爲必要）。
（2） 日本に於けるエスペラント出版物の詳細。
（3） エスペラントの團體（地方會、專門別、沿革消長の原因、中心人物、事業等）。
（4） エスペラント關係諸事業（講習、講演、展覽會、遠足、會報、他の新聞雜誌えの發表、等）。
（5） エスペラントの實用（かなり困難でもあらうが宣傳資料として及後輩の爲實用の手引として重要。その內容は例えば、エスペラント商品名、屋號、街路名、エス文カタログ、廣告、ポスター、看板、案內書、掲示、商用通信統計、資料通報、エスペラント使用商館、旅館等、團體、役所、會議、エスペラント關係決議、文獻、エスペラント實用實驗談、エス文入郵券、ハガキ、消印等）。
（6） 日本エスペラント運動の公的文書結集（協會、學會、大會等の規約、趣意書、聲明、決議、議事錄、役員名、役員會日誌等）。

B. エスペラント事業外部の諸事項

我々は社會の相手を熟知しなければならぬ。これらは大切な事だが廣汎であるから、當面目指す方面に卽して調査を進めることが適當であらう。例へば、學校教科に導入、オリムピック、萬國博えの實用を企圖するなら夫々、その對象の社會的性質、趨勢、機構、その關係者の夫々の組織、事業の性質細目、それに關係ある有力者等々を調査して始めて具體策が可能となる。今、全般的に考慮し主要と思はれる項目を例擧して見る。

（1） エスペランチストでない支持者の調査。(學術界、言論界、教育界、實業界、政界、官公界等、何處に如何なる支持贊成者があるか。)

（2） 友誼團體の調査(ローマ字會、國語協會、IALA, 其他言語、教育、學術、國際關係等聯關により友誼協調し得る他組織の內容)。

（3） 外部の一般書籍中エスペラント關係記事あるものゝ詳細な書誌。

（4） エスペラントに對し如何なる誤解が存するか。(反對意見の文獻、反對的個人及團體の無理解なる言説、態度、其他エスペラント事業に對する諸障害。)

（5） 其他、エスペラントの研究普及實用の諸事業遂行上當面する社會の諸機構諸施設は絕えず研究調査する必要がある。(例えば、出版物配給機構、廣告手段、產業團體、觀光團體等々。) 其他。

無論以上の如きは一度に遂行されるものではない。恒常的繼續事業として絕えず行はれる必要がある。最も望ましいことは、學會內に調査部を常置し、理解ある地方會、專門團體、個人團體等積極的な協力聯携の下に、合理的計畫が立てられ、各方面の成果が集中、管理され、利用に便なる發表方法が講ぜられることである。そして、全國の會員諸氏は之等調査事業の意義を深く理解して支持協力され成功せしめられたいものである。

KONGRESA FOIRO

(大會即賣所市)

SAITOO-Seiiĉi

11 月 21 日より 23 日まで東京で開かれた日本エスペラント記念大會に於いて、今回は始めて即賣市が催された。從來とてもエスペラント書籍、綠星旗その他二三商品の即賣は行はれたが今回は特製エスペラント玩具、Jubileo シャープペンシル、Z 萬年筆 (金文字 Jubileo 入)、頁ナイフ、神經衰弱の特効藥、ハウト石鹼、アテーノン其の他同志の農村工藝品、ホームスパンの豫約募集、美術染色豫約等の試みがなされ、特に萬年筆、シャープペンシル金文字 Jubileo の刻印の實演及び染色手藝の帛紗や壁掛等のエスペランターヂョの染色の實演等、それぞれ同志專門家が出張して參會者の爲めに實演してくれた。

只、この種の試みは今回始めてゞあつただけに準備が甚だ不完全で陳列の場所も非常に狹く、陳列も雜然として出品物や實演の宣傳紹介の方法も不備で出品者に對しても參加者に對しても甚だお氣の毒であつた點が多い。

此の種大會即賣市の事業の意義に就いて、今迄何人も充分に考へたこともないのではつきりした方針も定まつてゐなかつた樣だ。然し此の度の此の經驗の中から極力教訓を汲み取つて此の事業の意義と價値を學び將來に對する方針の示唆を得たいと思う。

元來、ザメンホフは大會を諸民族の友和の爲めの國際的祝祭としたい希望を述べている。此の事は萬國的大會だけでなく、國內大會に關しても考えて見るべき問題だ。エスペラント大會の意義と使命は色々あるであらう。人々に依つて期待も要求も千差萬別であらう。だが討論に重きをおくにしろ、親睦、娛樂におもきをおくにしろ、要するに人々の一大家族的友和團欒を目指す點でかわりはない筈だ。これに就いて昔の村祭のこと等を想い浮べる。鄕土の氏神のお祭りは住居全體を一大家族としての感情にとけ込まし、團欒を進めると同時に、昔は又これが

村の人々の經濟生活を組み立てる爲めの重大な年中行事でもあつた。昔のこれら神樣を中心とした祭に關聯し人々の集まる機會が、文化的にも經濟的にも人々を結び付ける大切な仕事であつたことは民俗誌家ならずとも何人も知る通りである。特に中世時代から近世へかけての商業の發達にこれら鄕土の祭の機會の定期市が貢献した役割を輕視する事は出來ない。これを思うとザメンホフが人類平和の祝祭にしたこと考えたエスペラント大會と云う年中行事もエスペラント人たちの經濟生活と一層密接な關係を持ち、これがあの樂しい村祭りの定期市の樣な催しを伴うならば、またどんなに愉快でもあり有益でもあることだらう。だが聞く所に依ると、現在エスペラントの萬國大會ではいまだ眞面目に此の問題は取り上げられないで只、何だかいかゞわしい際物の土産商品を觀光の椋鳥客に賣り付ける樣な不愉快な場面がやたらにあるばかりだとのことだ。眞面目なエスペラント人諸氏に是非考えてもらいたい事だがエスペラント人一人一人社會に生活する以上職業のない人はない筈だ。まじめなエスペラント人は又まじめに自己の職業を愛さぬ筈はない。それぞれの職業の方面でこれらの人が成功することはエスペラント運動の上にも大切な事だし、エスペラント人としての互の交友が各自の大切な事業に何等かの意味で役立つならばこれ程嬉しいことはない。又、その事は元來エスペラント運動の根本的目的でもある筈だ。近來、次第に各種分科會が盛になり、各自の職業的專門とエスペラントとの關係が問題になつている事はうれしい事だが特に今年實業關係の分科會が持たれた事は極めて有意義と言わねばならぬ。就いてはたゞ分科會で卓を圍んで話をするばかりが能ではなく各自のまじめな職業を實物商品を通じ、或ひは實驗までして互に紹介し、エスペラント人として各自の正業を相互援助をする機運をつくる事はそれ又決して小さい事ではない。これが萬國大會の際など各國の實業エスペラント人達が自已取扱い貿易商品を展觀して、エスペラント人の間で取引を結び、或は一般實業界えエスペラントの實用能力を示すことは極めて有意義なことゝ思う。一國內の大會では直ちに貿易取引が行われるとは限らぬがとも角エスペラント界のそうした機運えの一步として今回の卽賣市は有意義であつたと思う。來るべき日本萬國博覽會にはエスペラント人達は共同出品等の方法で自己の營業の爲めにもエスペラントの爲めにも盡さねばならぬであらう。今回の試みはその爲めにも必要な一步であつた。

單に商品に綠の星をつけたとかエンペラント名をつけた位の事が何だと輕視してはならぬ。この事業の中には極めて遠大な意味があるのだ。大會を機會に貧弱な參加者のポケットをあてにする際物商賣だ等と輕薄に考えてはならぬ。この中にはザメンホフが理想とした人類友和の大祝祭を眞實に樂しく又、有益なものとする實のある基礎をなすべき種子が潜んでいるのだ。今年の卽賣市は準備も不充分、理解も不徹底で場所も適當でなく色々失敗した點もある。然しこれらの缺點ばかりを見て大切な本當うの意義を看過しては困る。だから我々は吳々も强調しておきたい。今後は益々努力して Kongresa Foiro (大會卽賣市)を意義あるものにして行き度いと。卽ち、エスペラント人の相互扶助、生活の合理的向上に資するものにして行きたい。

今回、卽賣市で好評であつた商品は大會に參加されなかつた地方同志諸君の御希望に應ず可く世話人たちで御斡旋申し上げます。下記代金御拂込の上御申込下されば直送致します。

	定價 圓	送料 錢
★特製エスペラント玩具		
男兒用汽車 (Al la Kongreso 文字入)	0.30	12
女兒用乳母車 (Mia Kara 文字入)	0.60	”
★Z 萬年筆 (金文字 Jubileo 入)	2.50	”

★シャープペンシル（金文字 Jubileo 入）	1.00 0.60	〃 〃
★頁ナイフ（エスペラント標語入、木彫、淡漆）	1.50 1.00	〃 〃
★マテーノン（神經衰弱の特効藥）	1.00 0.50	〃 〃
★ヴイタミーノ（榮養藥、姙婦用、授乳婦用）	3.00	〃
★ハウト石鹸（優良化粧石けん三個入）	0.30	〃
★ホームスパン（福島縣農村工藝品純毛手織洋服地）男子三ッ揃一着分	30.00	着拂
★ザメンホフ肖像（額入用美術印刷）	0.30	3
★樂譜 Al la fratoj	0.10	3
★ 〃 Kanto de l' ligo	0.10	3
★ザメンホフ胸像（ブロンズ製）	15.00	着拂

（御申込は學會內實業分科會世話係宛 ）

ESP. 學習動機その他調査報告

浅草エスペラント會

本號にやつと發表の機會を得た。いろいろのことが遲延の原因だつた。本會調査部については昨年八月の本誌上で詳細發表した通りであるが、爾來我々は全國同志諸氏の熱心なる御援助と御鞭達を受け努力をつゞけてきた、そして遅ればせながらその經過について報告申上げたいと思ふ。然しこの報告はまだ、完成された報告では勿論ない。實は本調査の着手に當つて若干用意の周到を缺いた點などもあつたりして、そのため我々が當初に期待してゐたやうに成果も得られず殊に未完のまゝでこゝに報告申上ぐる事は甚々遺憾であるが調査開始以來そうとう時日も經過してしまひこの調査の結果に御期待下さつて居られる方々に報告延引の申譯傍々併せて本調査の完成になお一層の御援助を全國の同志諸氏にお願ひするため中間的報告ながらひとまづ發表することにしたのである。申すまでもなくこの種の仕事は同志諸氏の御援助を惜いては絶對に成果を期し得ないので、エス運動將來の指針としても貴重な資料となり得る本調査の意義を御理解下さつて、微力な我々に今後の御協力を給はるやうついで乍らお願ひ申上げる次第である。

再記すれば目下本會調査部で着手してゐるものは

1. エス語學習動機その他に關する調査リスト及び統計の作成
2. エス語名の商品（現品、包裝、廣告文、其他すべてを含む）を蒐集しリストを作成し且つそれらの物品を展覽會材料として整備すること
3. 新聞雜誌に現はれたエス語記事の蒐集及それらの調査リストの作成
4. 各國エス書き案內書等の蒐集

等であるが、今回はまづ上記の第一と第三に就てその整理を終つた部分から報告申上げやうと思ふ。

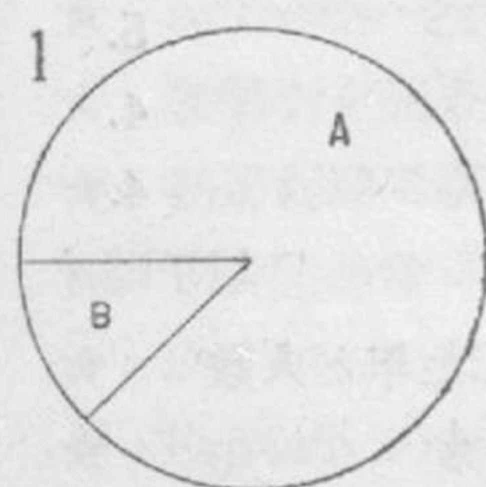
1. **エス語學習動機に關する調査**

昨年八月號の誌上では、本誌二百號記念特輯號掲載のエス界先覺者五十三氏の回顧談を材料

としてそれぞれ規定の調査項目に當てはめ統計を作り、本調査部の仕事につき具體的な說明を試みたわけであつたが、その際も附記した如くあの統計は全く記事のみを資料として作つたもので調査項目に對し不充分な點も多くあつたりしたが、今回は直接本人からの回答によるものであり、しかも現在活動されてゐる記憶の新らしい若い人々が中心になつてゐるだけ、より正確な調査が出來たのである。然し甚々遺憾な點は回答者數のまことに尠かつた事である。地方會或は個人的に送つた 2500枚の調査紙に對し僅か 382 名の回答數しか得られなかつた。願はくば今後こうしたエス運動のための仕事にはもつと積極的な支援をこそ望ましい次第である。この點回答下さつた地方會の中でも「館野エス會」の如き 20 名餘りの全會員が擧つて早速と回答を寄せて下さつた事はさすが大石先生の御膝下だけにと、いたく我々は感謝申上げてゐる次第である。

扨て以下の統計は回答者數 382 名に就てゞある。尙職業別だけは 255 名に就ての統計でる。調査上の種々な感想を附記したい豫定であつたが誌面の都合もあり割愛した。

尙、圖解の統計は 1936 年度現在の數字である。



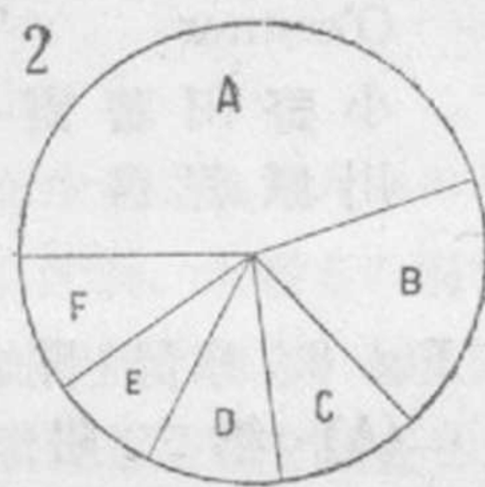


Fig. 1. 性 別

(A) 男 336 名

(B) 女 46 名

合計 382 名

Fig. 2. 地方別

(A) 關 東 174 (內東京 125)

(B) 近 畿 69 (內大阪 31)

(C) 中 部 38

(D) 北海道 35

(E) 九 州 29

(F) 其 他 37 (內東北 19. 中國 5. 四國 4. 大連 5. 臺灣 3. 滿洲 1.)

Fig. 3. 職業別

(A) 會社員 51 (銀行員、事務員)

(B) 官 吏 43

(C) 鐵 道 32

(D) 學 生 26

(E) 工 業 20

(F) 商 業 19

(G) 其 他 33 (宗教 3. 農業 2. 醫師 7. 敎員 10. 記者 2.)

(H) 無 職 7

(I) 不 明 24

Fig. 4. 何によつてエス語の名稱を始めて知つたか。

(A) 新 聞 44

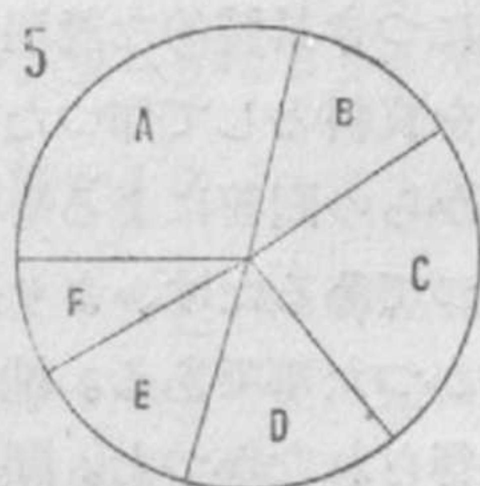
(B) 雜 誌 62

(C) 知 人 162 (內 Esp-isto と明記ありたるもの 77)

(D) 宣 傳 38 (講演、パンフレット等)

(E) 其 他 48 (書店 ESP 書 12, 書籍出版物 12, ラヂオ 9.)

(F) 不 明 28



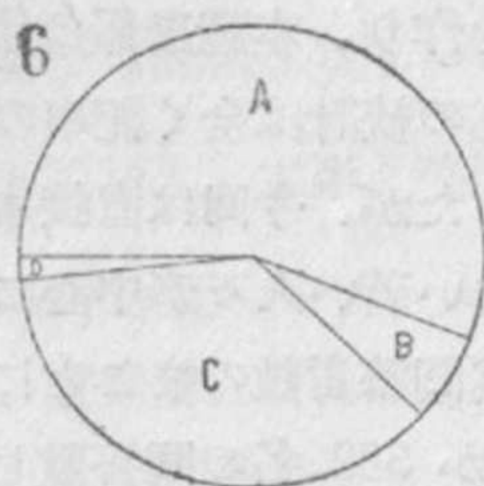


Fig. 5. ESP. の學習を始めた動機

(A)	好奇心	109
(B)	好學心（語學的興味）	47
(C)	勸誘されて	89
(D)	國際語運動を理解して	58
(E)	其他（内文通希望で 21）	49
(F)	不　明	30

Fig. 6. ESP. を始めて學習した時の方法

(A)	受　講	215（一般講習會）
(B)	受　講	24（個人教授 14. ラヂオ講座 10.）
(C)	獨　習	138
(D)	不　明	5

備考、 獨習者の使用せる獨習書で書名の明記ありたるもの 128 名中次の如し

小坂狷二著「捷經」	26.
小坂、秋田著「模範獨習」	27.
石黒著書	20.
千布著書	14.
O'conner	5.
小野田著書	4.
川原著書	4.

以下略す

Fig. 7. エス語の名稱を知つた年と人數

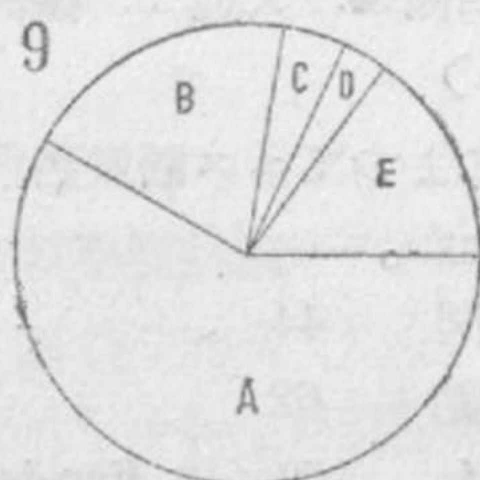
(A)	第二期	5
(B)	第三期	13
(C)	第四期	120
(D)	第五期	193
(E)	不　明	51

Fig. 8. 學習を開始した年と人數

(A)	第二期	4
(B)	第三期	8
(C)	第四期	60
(D)	第五期	305
(E)	不　明	5

備考、 第七、及八圖の「期」とは便宜上エス語發表年後十年毎を一期としたもの、即ち。

第一期	1888～1897
第二期	1898～1907
第三期	1908～1917
第四期	1918～1927
第五期	1928～1937



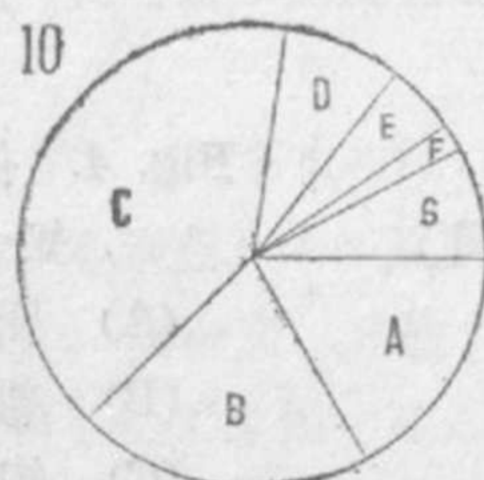




Fig. 9. エス語名稱を知つた時の年齢

(A)	10歳～20歳	223名（10歳以下無し）
(B)	21歳～25歳	74名
(C)	26歳～30歳	16名
(D)	31歳以上	10名
(E)	不　明	59名

備考、 平均年齢 19.2 歳弱（男 19.5 歳 女 18.8 歳） 最高年齢 53 歳

Fig. 10. 學習開始の年齢

(A) 12歳～18歳　64名（12歳以下無し）

(B) 19歳～20歳　78名

(C) 21歳～25歳　154名

(D) 26歳～30歳　43名

(E) 31歳～40歳　20名

(F) 40歳以上　7名

(G) 不　明　16名

備考、平均年齢（男22.8歳、女21.4歳）最高年齢54歳

Fig. 11. 現在の年齢

(A) 15歳～20歳　22名（15歳以下無し）

(B) 21歳～25歳　143名

(C) 26歳～30歳　104名

(D) 31歳～40歳　85名

(E) 41歳　以上　17名

(F) 不　明　11名

備考、平均年齢 28歳（男 28.4歳　女 24.5歳）最高年齢者 78歳 尚名稱を知ると同時に學習を開始した人は 382名中 118名であつた。

附記、（本統計の作成に當つて會員石黒捷三郎君が殆んど獨力で多大の御勞力を捧げて下さつた事を玆に厚く謝意を表します）。

回答者諸氏の本調査に對する意見、希望の主なるものを參考まで掲げてみよう。

★ Adresaro を作れ。

★ 職業別を調査せよ。

★ 初講程度で學習を中止された人々のその理由を調査せよ。

★ 學習開始當時の有配偶、未婚者の別を調査せよ。

★ Esp-isto の國際、國內、地方、特殊團體の所屬名を調査せよ。

★ Esp-isto の購讀新聞雜誌類を調査せよ。

★ 調査が完成したら印刷して（パンフレツトの如きもの）有料で配布せよ。

以上不備な點も多々あるがその點は今後の完成にまつて、ともかく一應の報告だけに止め同志諸氏の御批判御敎示を乞ふ次第である。

3. **新聞雜誌とエスペラント。**

これは會員松本健一君に擔當願つて調査をして戴いてゐる「新聞雜誌に現はれたエスペラントに關する記事の統計」である。便宜上年代の新らしい昨年度から順次逆か上つて古い年代へと調査を進めてゐるが一先づ整理を終へた 1936年と 1935年度から報告申上げる。

統計の資料はすべて本誌の「新聞とエスペラント」欄によつたものでその點同誌に掲載の洩れてゐるものは從つて調査不可能と言ふわけであるが新聞の方は昨年から學會で切拔通信社に依賴して主要新聞は勿論その他エスペラント關係の記事一切を集めてゐるから 1935 年以前にくらべれば、調査洩れの點は極めて尠いと思ふ。

まづ 1936年と 1935年度に於ける新聞雜誌への掲載回數を月別にして次に示そう。

掲載回數月別

1936 年	1月	2″	3″	4″	5″	6″	7″	8″	9″	10″	11″	12″	計
新聞	16	17	31	38	23	37	33	38	40	54	31	29	387
雜誌	10	5	11	10	9	6	6	10	13	10	4	8	102
其他	3	1		1		1	2				1	1	10
計	29	23	42	49	32	44	41	48	53	64	36	38	499

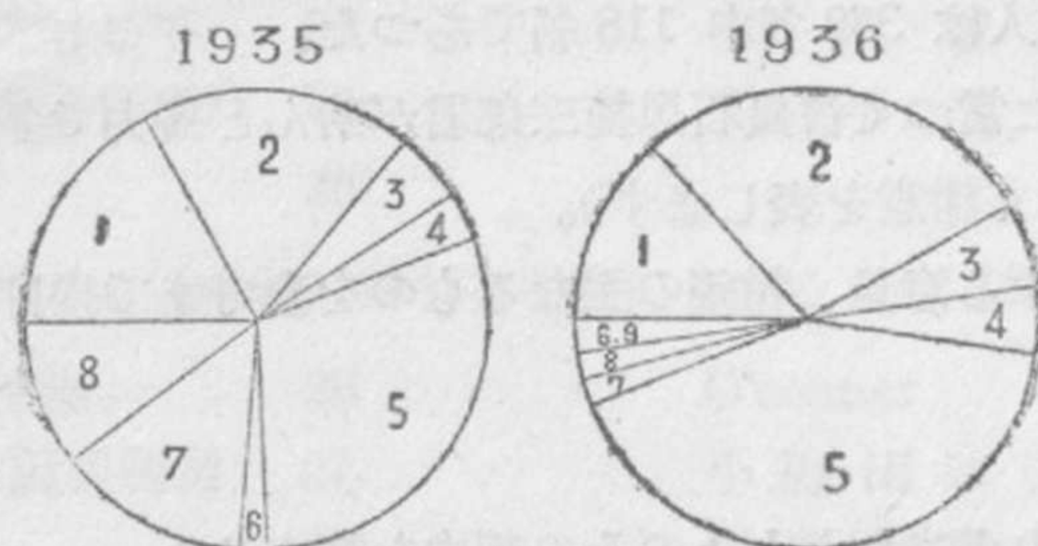
註、月別は R. O. 誌への掲載月ではなく、記事掲載の新聞の日附。雜誌はその發行月である。又その他とあるのは校友會報、臨時出版物（日米學生會議報告書等）の類である。掲載回

數の計算は、同一事項つまり連載ものはその連載回數を、同一の號に數種掲載されてゐるものはその數を各々加算したのである。

1935 年	1月	2″	3″	4″	5″	6″	7″	8″	9″	10″	11″	12″	計
新　聞	10	5	4	7	5	2	4	1	15	19	7	23	102
雜　誌	6	4	5	3	4	2	2	2	1	4	2	4	39
其　他	3		2	2	3	3	1		5	2		2	23
計	19	9	11	12	12	7	7	3	21	25	9	29	164

上記の表でみると 1936年は前年の 1935年に較べ掲載回數が 335回を超して三倍強となつてゐる、試みに概算ではあるが 1934年は 120回位ひ、1933年、1932年は各々 100回位である。

次にその内容別を表で示してみよう。



內 容 例	1936 年	1935 年
(1) エス語を取扱へる論文。	54	25
(2) エス語に關する隨筆及び紹介。	117	28
(3) エスペラントより飜譯。	22	7
(4) 文中にエスペラントに觸れてゐるもの。	18	5
(5) エスペラントに關する記事、報道。	168	45
(6) 講座、	1	2
(7) 其他、	9	20
(8) エス文による論文、	9	15
(9) エス譯作品。	7	0

註、(1) はエスペラントを主題とせるもの、(4) はエスペラントに就ての記事ではないが一寸エスペラントの文字が出てくる程度、(5) は主として新聞雜誌記者により取扱はれたエス界の出來事、或はエスピストの動靜、(7) は新聞雜誌のテイトーロ、論文のテイトーロ、或は目次がエス文で書かれてゐるもの。(雜誌等の場合毎號出てゐるものは一回しか算入しない) (6) の講座はその年に開講されたもので 1936年に於ては 1935年より繼續の講座が二つあるがこれは計算に入れてゐない。以上の內容別はすべて一件を一つに計算し連載のものは回數を算入してゐない。 (未完)

尙、本調査については擔當者松本健一君の手許に精細なカードを作つてあり、掲載新聞雜誌の種別數、地方別、執筆者數、等種々の統計數が調査されてゐるが、その統計のグラフを目下作成中なので本號に全部の詳細を報告申上げかねた次第である。 (渡部秀男記)

(本會調査部に對する御問合せ其他の通信は東京市下谷區北稻荷町 52 番地石黒方淺草エスペラント會宛に)。

圖書館綠化運動調査報告

婦人エスペラント聯盟

圖書館問合せ回答整理の結果に就てわ既に本誌7月號にその大體お報告したので此處に再びそれお繰返す事おやめ單に統計のみおかゝげる事とする。

縣別	所藏館	無所藏館	藏書數
樺太	2	—	4
北海道	3	3	5
青森	3	2	10
岩手	—	2	—
秋田	1	5	2
宮城	1	5	19
山形	2	8	2
福島	2	6	2
長野	3	11	43
群馬	3	3	19
栃木	1	2	3
茨城	—	1	—
千葉	2	10	14
埼玉	1	8	1
東京府	25	2	133
神奈川	3	7	12
山梨	2	1	6
靜岡	2	8	12
愛知	3	20	31
新潟	6	19	20
富山	3	20	12
石川	3	16	6
福井	1	2	1
岐阜	2	1	9
滋賀	2	10	3
三重	2	7	5
奈良	1	5	4
和歌山	—	4	—
京都府	3	2	約 400
大阪府	4	3	18
兵庫	4	8	32
岡山	1	8	7
島根	—	3	—
廣島	3	12	10
山口	6	10	13
愛媛	2	4	4
高知	—	7	—
德島	1	3	9
香川	4	18	8
福岡	6	7	33
佐賀	—	3	—
大分	1	4	1
宮崎	1	1	1
熊本	—	9	—
鹿兒島	1	10	3
長崎	1	5	8
朝鮮	5	3	18
臺灣	12	6	24

又藏書の種類とその順位とお示せば次の通りである。

藏書種別及び順位

模範エス獨習（小坂・秋田）	45
改訂增補エス全程（千布）	30
エスの學び方（石黑）	27
エス捷徑（小坂）	26
初等エス研究（川原）	18
エス ABC の讀方から（石黑）	16
エス入門（石黑）	14
エスの手紙（石黑）	14
Elemento de Esp.（川原）	13
エス 30 日	13
エスの基礎	12
新撰エス和辭典（岡本）	12
正しく覺えられるエス（石黑）	9
エス講習用書	9
エス四週間	9
大成エス和譯辭典（千布）	7
エスの話	6
プロエス必携	6
獨習自在エス講義	6
初等エス講座	6
日本エス學事始	5
國語の擁護を論じて	5
愛の人 Z.	4
エス讀本及文範	4
エス中等讀本	4
大成和エス辭典	4
エス論	4
エス講話	3
エス概論	3
エス日記の書方	2
エス獨習	3
エス運動史	3
エス文例集	3
エス讀本	3
Fundamento de Esp.	3
エス獨習書（川原）	3
三十日間獨習エス入門	3
模範エス會話	3
醫家用エス獨習書	3
新撰和エス	3
エス通信の實際	3
カナ付エス和新辭典	3
エスやさしい讀物	3
エス第一步	3
イソップ物語（詳註）	3
Esp.（JEI）	3
我が國に於ける外國語問題とエス	3
國際語エス講義（金田）	3
夜の空の星の如く	3
エス教科書	3
Z. の生涯	2
綠の星を憧れて	2
エス日本語辭典（黑板）	2
エス模範練習讀本（小坂）	2
エス發音研究	2
エス講座	2
初等エス教科書	2
教育とエス	2
エス講習讀本	2
模範エス手紙の書き方	2
エス雜話	2
Krestomatio	2
エスの學び方獨習三十日	2
エス獨習	2
日本語エス小辭典	2
海の娘（梶）	2
國際語初步	2
エス獨習（村田）	2
エス對譯詳註叢書	2

以下 1 册づゝ

エスペラント研究
月刊「エスペラント」（希望社）
エス會話
短期講習用エス讀本
エス助詞詳解
エス速成教科書
初等講義錄
エレメント・デ・エスペラント
國際補助語エス
國際語エス綱要
La Toreno
Petro
エス和辭典
Eliro

Bengalaj Fabeloj
Aelita
Ĉaso al la diablo, La
國際語エス獨習書
エス全集(千布)
世界語の歴史(ドレーゼン・高木譯)
エス手紙の書方(下村)
秋田雨雀戯曲3篇
リングヴイ・レスポンドイ
和エス辭典
エス和中辭典
大成エス新辭典
エス年鑑
實用エス會話
實用エス和對照會話
エス讀本
レイモント短篇集
魔法使
心の片隅
マテオ・フアルコネ
エス講座
愛ある所神あり
ザメンホフ
新エス和辭典(梶)
中等學校英語科問題とエス
日本に於ける外國語問題(高橋邦)
エスの本質とエス文學
エスの本質
獨修エス(岡本・板橋)
日本エス叢書 1. 白珠集
エス研究叢書
エスの手引(小坂)
エス階梯(高塚)
プロエス講座
國際語研究
エス講義
新撰エス和補遺
Memlernolibro de Esp. (石黒)
Esperanto(丸山・ガントレツト共著)
(藏書種別順位)
和エス辭典(未來社)
組織的研究エスペラント
全世界通用語エス獨習
日・エス・支・英會話と辭書
エス應用文例集
醫學エス文集
ロンドン塔のエス語
Arammar of Esp.
English Esp. Dic.
エス會話(千布)
エス獨習講義(安達)
孝　經
大學・中庸
エス講習書(兒玉四郎)
エスの思出
エスと文化
世界語獨習
國際通信の常識
エスの夕
世界語(丸山順太郎)
エス講習書(日本エス協會臺灣支部)
世界語(長谷川辰之助)
新エス講座(石黒)
日用語辭典(芳賀岡太郎)
「希望」

(整理係 I. H.)

Pri la "Originala Verkaro"

(Sesa parto)

W. Bailey, L. K.-ano

248. 5, 26, 28, 31, 44. *E.*
28. *de longe*
34. *famo* anst. *faro*

249. 6. *mian projekton* ne dise (t. e. ne kursive en La Revuo)
8, 12. *E*
40. *ekzamenitan*

250. 16. forigu komon post *lumo*

251. 10. pri Esperanto aŭ fari ian alian uzon de Esperanto, kaj mi...
36. forigu komon post *mi*
45. „ „ „ *eblon*

252. 24. *la rajton eldoni*
26. *Esperanta*; forigu komon
27. „ „ „
28. „ „ „
37. komo post *bona*

253. 18. *prosperos*
39. forigu komon post *unuecon*

254. 2. „ „ „ *plimulto*
3, 15, 32, 33, 34, 41. *E*
32. *Institucioj*
39. *kongresa*

255. 10, 27. forigu komon post *rajton*
15. *E*
32. *ĉi* anst. *ĉiu*

256. 2. forigu komon
11. *formojn kaj vortojn, kiuj*
27. *ne deviga*
41. *;* anst. *:*

257. 29, 35. La U. E. A. gazeto havas *dezirus*, B. E. *deziras*; kredeble *dezirus* estas ĝusta.
32. *;* anst. *:*

258. 43. *Ĉu tiu ĉi dolĉa*
44. *respondus;* (tia *us* kun negativo estas sistema ĉe Z., tamen multaj Esperantistoj tion ne rimarkis)

259. 2, 7, 35. "*!* anst. *!*"
5. *absurdo*; *respondos*
21. *ke la efektiviĝo de la sankta ideo ne sole estas tute ebla, sed ke al tiu ĉi efektiviĝo ne...*
22. *malproksime*
33. forigu komon (ne en la gazeto, tamen tute konforma al la Z. sistemo)
44. forigu la noton: la teksto havas *interkomunikiĝon*!

260. 1. forigu komon post *tiam*
13. *antaŭ la Volapük*
34. *renkontis malamikojn, kaj ankoraŭ malamikojn ne pasivajn,* (kiel ĉe 227/25.)
43. *presejon* (kiel ĉe 227/33.)

261. 13. *Volapük, baldaŭ transiris sur la flankon de Esperanto, malgraŭ ke ili estis jam forte kunligitaj kun la Volapük, jam multe laboris por ĝi kaj...*
14. forigu komon post *pretaj*
27. „ punkton „ *libron*
28. komo post *ke*
30. forigu komon antaŭ *ke* (vidu pri 259/33).
32. *ian* anst. *iun*
33.). „ .)
40. *metos*
43. *karaktero*

262. 25-26. *estus ankoraŭ pli, ankoraŭ multe pli feliĉa*
39. *iam la lingvo*

263. 4. forigu komon post *kondiĉo*
6-7. *Pli bone estas iri laŭ vojo, kiu alkondukos nin al la celo pli malrapide,—sed iri kune kaj unuanime, —ol serĉi ĉiufoje novajn vojojn nur tial, ke al ni ŝajnas, ke tiuj ĉi vojoj alkondukos nin al la celo pli rapide.*

11. *kondukas*
28. *laŭtaj* anst. *laŭdaj*
30. forigu komon post *jaroj*
33. *Volapükistoj*
34. *tiel* anst. *tial*
36. *Sed eĉ nun ankoraŭ, kiam la batalo ricevis jam formon tute alian, kiam la nombro ...*
38. *pro* anst. *por*
264. 5. *!!* „ *!*
19, 31. *Volapükistoj*
25. *do* anst. *la*
38. *donos*
41. *penas*
44. *trovos*
265. 7, 16. *V*
8. forigu ambaŭ komojn (vidu pri 259/33; en tiu frua tempo (1889) Z. ankoraŭ ne tute fiksigis la uzadon de komoj en tiaj okazoj)
10, 37. forigu komon
266. 3. *tio* anst. *tiu* (tia *por tio*, uzita kelkfoje en la plej frua tempo de nia lingvo, havas la sencon de *kontraŭe*, aliflanke, kvazaŭ *kompense por tio.* Alia ekzemplo troviĝas ĉe F. K. 49/26.)
5. forigu komon post *tio* (vidu pri 259/33)
7. forigu komon post *ĉio* (vidu pri 259/33)
10. *Volapükistoj*; forigu komon post *kulpigu* (vidu pri 259/33)
28. forigu komon post *diri*
43. *jam* anst. *iam*
267. 6. forigu komon post *ĵ* (vidu pri 259/33)
10. *Ruso*; *Rusoj*
13. *Rusoj*
15. *Ruson*
26. komo post *u*
31. *la Volapük'on*
35. *arte* dise presita
268. 7. forigu komon post *preta* (vidu pri 259/33)
32, 33, 34. *Volapükistoj*
269. 14. *ni* anst. *mi*; forigu [1] (vidu pri l. 44)
23. forigu komon post *scius* (vidu pri 259/33)
27 (duloke), 28 (duloke), 29, 35. *Vi* anst. *vi*
31. *Volapükistoj*
44. forigu la noton; la teksto havas *tiam*; la arkaikaj formoj troviĝas nur en la Unua Libro kaj la Dua Libro.
270. 1. forigu komon post *ne*
18. *renegatoj*
22. *ne sole ne eltiris* (eraro ankaŭ en la gazeto)
25, 29, 36. *Volapükistoj*
271. 29. „
30, 32 (duloke), 36, 37, 38, 39, 40. *Vi* anst. *vi*
272. 6. *ol ili* ne dise presita
26. forigu komon post *postulataj* (vidu pri 259/33)
28. forigu komon post *laboron* (vidu pri 259/33)
29. forigu komon post *sin* (vidu pri 259/33)
30. *Volapükistoj*
32. forigu komon post *Volapük* (ĉi tiu komo *ne* estas laŭ-Zamenhofa)
38. *alportas*
40. *alia—: alia:—*; *tuta* anst. *tute*
42. *Afrikanoj*
273. 2. 3, 4, 6. *Vi* anst. *vi*
9. forigu komon post *volos* (vidu pri 259/33)
14. *afero.* " *Vi vidas* (ĉi tiu " signas la finiĝon de la citita frazo, kiu komenciĝas en la 9a linio); *Volapükistoj*
17. *ŝajna* dise presita
19. *vera* „ „
27. *Volapükistoj*

33. forigu komon post *deziris* (vidu pri 259/33)
34. forigu komon post *mallongaj* (vidu pri 272/32)

274. 3. forigu komon post *ridinde* (vidu pri 259/33)
5. „ *Vi* anst. *vi*
6. forigu komon post *leĝojn* (vidu pri 259/33)
12. *Volapükistoj*
26. *la kondiĉon de mallongeco estus ja eksterordinare facile, se tio ĉi estus efektive la klara intenco de*
30. *Kiel* ankaŭ en la gazeto, tamen devus esti *Kial*

275. 3. *dusilabaj en Volapük povus kuraĝe esti anstataŭita per unusilabaj kaj la vortoj*
23. forigu komon post *pensas* (vidu pri 259/33)

277. 6. *eltiras* anst. *altiras*

280. 16. *egalpezon*

281. 28. *nomos*

282. 2. *nur* anst. *nun* (eraro ankaŭ ĉe F. K. 276/10)
25. komo anst. ;
44. la eraro estas korektita en la sepa eldono de F. K.

284. 5. forigu komon post *kalkulon*

286. 26. komo post *tabuloj*

287. 35. *formo* dise presita (t. e. kursive presita en F. K.)
43. *dubus*

288. 6. *signifus*; eraro en F. K. p. 284; supozeble ĝi ankoraŭ troviĝas tie; almenaŭ en la 14-a eldono (1933) ĝi restis ne korektita.
24. forigu *ne* post *rutino*: eraro en la pli fruaj eldonoj de F. K., korektita en la sesa eldono.
36. *kiamaniere*
42. *kia* dise presita (t. e. kursive presita en F. K.)

289. 2. forigu komon post *alendi* (vidu pri 259/33)
37. forigu komon post ke (vidu pri 273/32)

290. 34. *Esperantan*
38. *Eŭropa*
40. *Eŭropanoj*; *Amerikanoj*

291. 1. "*!* anst. *!*"
8. *ĉe* „ la dua *de* (eraro ankaŭ ĉe F. K. 288/12; ne la lernanto postulas.)
17. *Esperante*
19. *Esperantan*
22. *Ĉiu*
32. *gvidadis*

292. 28. *Kiel*
31. *ĉiuj* dise presita (t. e. kursive presita en F. K.)

294. 1. forigu komon post *eraron*; *jam nur bezonas*
6. *nur* dise presita (t. e. kursive presita en F. K.)
8. *ĝi estas multajn, multajn fojojn*

295. 10. *rilatis*
15. Leibnitz

298. 22. *sensencaĵon*
38. *konsistas plene el*
39. forigu komon post *ideo*

300. 10. *restos.*
19. *kia* anst. *kiam*
28. *facile* anst. *facila*

301. 1. *tion* „ *tio*
19. *kaj ke sekve se* (sen komo); *ĝi el la jam ekzistantaj*
29, 34, 39. *Volapükistoj*
35. *Amerika*

302. 34, 35. = (signo de egaleco) anst. simpla streko
35. *ne sole donas* anst. *donas ne sole* (korektita en la sesa eldono de F. K.)

305. 29. *troviĝos* (*troviĝu* en F. K., tamen vidu O. V. 284/3.)
31. forigu komon post *espero*

306. 15. *principo* ne dise presita (t. e. ne

kursive presita en F. K.)
18. forigu komon post *ke*
19. *la fino absolute nenion donus!*
33. *diversajn* dise presita (t. e. kursive presita en F. K.)
38. *kiun* anst. *kiu*
42. *bonege* „ *bone*
307. 15. *Volapüka*
25. *Volapükistoj*
32. *restus* (*restis* en F. K., sed la sekvanta linio montras, ke devus esti *restus*)
308. 5. *rifuzos*
13. *ilia* anst. *alia*
41. *Esperanta*
309. 2, 3. „
310. 11, 12, 15, 17. punktokomo anst. punkto.
41. *Esperanta*
312. 39. forigu komon post *timis*
315. 4. forigu komon post *justeco*
316. 37. *pro tio* anst. *por tio*

La cetero povas resti (La Revuo Orienta, p. 365-367) kiel ĝi estas presita, esceptante la jenon:

354. 4. *frazo* anst. *farzo*
361. 26. komo post *kapablojn*
3?4. 38. forigu komon post *taskon*
407. 17. *elmetata al* anst. *elmetata el* (La kompostisto donis *elementa* anstataŭ *elmetata!*)

Korektoj por " La Revuo Orienta " (1937)

W. Bailey, L. K.-ano

p. 108. 35/33. *ĉian* anst. *ĉiam*; forigu *arkaika formo*: tiaj arkaikaj formoj troviĝas nur en la " Dua Libro ", ne en la " Aldono ".
37/12. *povos*, ne *p o v o s*
p. 109. 50/31. *Esperantistoj*
54/ 4. *Esperantan*
59/34. Kiel diras la noto [3], la teksto havas *la kelkaj unuaj jaroj*; tamen la eraron ni devas forigi, enmetante la prepozicion *en* antaŭ la vortoj cititaj, ne per la akuzativigo de la frazo.
p. 11? 61/28, 30. *Viaj* anst. *viaj*
38 (duloke), 40. *Vi* anst. *vi* (kutimo, kiun Z. poste forlasis; vidu L. Resp. p. 49.)
62/ 2. *Vi* anst. *vi*
69/2?. *Nurnbergo* anst. *Nürnberg*
71/18. " anst. ". (" La Revuo Orienta " havas *ant*)
p. 161. 73/15. forigu komon post *ĉion*
16. *kun la malnova ordo kaj kun la konfuzoj*
32. *Esperanta*; *Nurnbergo.*
33. *Esperantistoj*
43. *mi* (ne dise)
75/ 9. *faris, estos* anst. *faras, estas*
26. *libera kunigo de*
76/ 1. *kiom da fiktivaj*
10. *mi* anst. *ni*
30. *voĉo elektanta, sed ne administranta), tute egale*
31. „*pago de klubanoj*" anst. ‚*pago de klubanoj*'
32. ." anst. ".
77/11. *neniel* anst, *nenial*
13. *la erarojn ne vidas*
14. *mi vidas ilin klare*
15. *Nurnberga*
78/31. forigu komon post *zorgu*
32. *magazenoj kelkan nombron*

da ekzempleroj de lernolibroj Esperantaj (en kiu ajn lingvo
37. *Esperantajn, ni lasas*
41. forigu komon post *rimedojn*
79/15. *A. F. Runstedt*
23. *propagado* (La radiko *propag'* estis uzata flanke de *propagand'* en la jaroj 1830–1894.)
27. *Esperanta*
29. *Esperanta-rusan*
30. *rusa-Esperantan*
32. *Esperantistoj*
41. *al Vi je Via letero*
42. *Via*
43. *Vi*
44. Vin; *Vi*
80/13. *promesi, ke li trovos du novajn vastigantojn. Sed neniu povas promesi, ke li ion trovos, ĉar la*
80/14. *;* anst, post *dependas de ni*
42. *Al s-ro T.* anst. *Al s-ro J.*
43. *Esperanta*
81/ 1. *volante* anst. *volonte*
8, 9. *Esperanta*
16. *laŭ la ortografio Esperanta, aŭ laŭ la ortografio de*
23. *difinite* anst. *definite*
30, 35 (duloke), *Vi* anst. *vi*
41. *mi tradukis* anst. *ni tradukis*
82/ 4. *Esperanta* „ *Esperanto*
43. forigu komon post *fari*
85/11. *Vi*; *Via*
86/ 2. *estas* (La R. O. navas *estos*)
94/31, 33. („ „ 31, 43)
100/21. *Esperantistoj*
109/ 4. forigu streketon
110/27. punkto post *No*

La noto * estas parto de la letero; ĝi devus stari antaŭ la linio 26.

114/35. *unu paro da* anst. *unu paro de* en la noto.
117/31. *sofismo* (La R. O. havas *sofisma*
118/ 8. *jes* anst. *Jes*
123/21. (La R. O. havas *123/27*)
125/24. („ „ 125/14)
126/28. forigu *senpaga*
127/22. *senpaga* anst. *senpage*
139/30. forigu ekkrian signon (en la R. O. mankas *30*.
144/42. *neŭtrala* anst. *neŭtrale*
151/33. *Viaj* (dise)
156/34. (La R. O. havas *aust.* anst. *anst.*)

Aldonaj Korektoj por la "R. O." N-ro 9

W. Bailey, L. K.-ano

Mi trakontrolis la notojn en ĉi tiu numero; jen kelke da pluaj rimarkoj:

forigu *200/18. Kanalošsy*
forigu *200/21. de la konkurso*
aldonu *201/32. movon* anst. *monon*
238/19. forigu komon post *esperantistoj*
241/19. „ „ „ *afero*

Ĝis antaŭ kelke da semajnoj mi ne vidis originalan ekzempleron de la numeroj 62 kaj 64 de la malnova gazeto; mi havas nur manuskriptan kopion, kiu ne estis tute ĝusta. Sed nun ĝi estas ĝustigita, sekve mi devas nuligi la notojn pri 200/18 kaj 200/21

kaj aldoni noton pri 201/32. 241/19 havas du komojn, sekve la plenigo "post *afero*" esta, bezona. (27 Sept. 1937)

* * *

Eĉ nun la ĝustigoj de la O. V. ne estas kompletaj. Antaŭ kelke da tagoj mi trovis, ke mi ne enmetis en la liston.

79/41. *Vi, Via* anst. *vi, via*
42. *Via* „ *via*
43. *Vi* „ *vi*
44. *Vin* „ *vi*

Kredeble estas tiel same ĉe 104/32 ĝis 40; en la plej fruaj tagoj *Vi* k. c. estis kutima, sed poste Z. forlasis ĉi tiun formon, konforme al la Respondo sur p. 48 de la Lingvaj Respondoj. (17 Okt. 1937)

MOVFORTO de SANGOCIRKULO

de Niŝi-Kacuzo
tradukis Jui Ĉuunoŝin

Vortoj de tradukinto

Oni diras, ke medicino faris grandan progreson. Sed tamen, ĉu tio estas vera? Se jes, la nombro de malsanuloj povus malmultiĝi. En fakto, tute male! Kion parolas la fakto, ke korpa strukturo de la homoj malboniĝas kun ĉiu jaro, malgraŭ la higiena aranĝo perfektiĝas jaron post jaro?

Ĉu ne kuŝas grava eraro en nuna medicino? Estas necese, ke ni esploru denove la medicinon ekde la fundamento. En verko "Sana Vivo" (Gesundes Leben), kiu aperis antaŭ nelonge, d-ro Kulbs, Prof. de Medicina Fakultato de Köln Universitato, skribas jene:

"Nia scio pri sangotuboj ankoraŭ nun estas tre mizera. Sed estas facile supozoble, ke grava faktoro, kiu povus regi homan sanon, estos eltrovata en sangotuboj."

Jam 10 jarojn antaŭe li, Niŝi Kacuzo, eksĉefinĝeniero de subtera tramo de Tokio, malkaŝis novan metodon konservi homan sanon kaj kuraci malsanojn. Li posedas specialan lingvan talenton, kaj pristudis preskaŭ ĉiujn verkojn en Usono, Anglujo, Germnujo kaj Francujo, kaj ankaŭ klasikaĵojn de Ĥino kaj Budaismo. Kiel la rezulto de lia longedaŭra studado en medicino kaj matematiko, li kreis novan teorion de medicino, kies fundamento kuŝas en tio, ke la movforto de sangocirkulo estas la kapilareco en sangotubetoj.

Lia mova saniga metodo donis al la publiko multdan efikon dum malionga tempo

Praktikantoj de lia metodo kreskas kun ĉiu tago en mia lando, kaj ankaŭ en Usono de post lia vizito en lasta jaro. En Usono li publikigis sian novan teorion kaj la metodon, kiuj kaŭzis al la Usona popolo grandan sensacion. En venonta jaro li forlasos Japanujon por viziti Eŭropon. Lia celo estas publibigi sian studon ankaŭ en Eŭropo.

Mi kredas, ke lia vizito ankaŭ kaŭzus al la Eŭropa publiko grandan sensacion kaj servus al medicinistoj korekti la ĝisnuna eraron. Li deklaris, ke li donos 15,000 jenojn da rekompenco al tiu, kiu klarigos matematike la forton de nia koro, ke ĝ, estas la movforto de sangocirkulo en homa korpo.

Ĉu iu povus fari klarigon?

× × ×

× × ×

Por klarigi teorion de la sangocirkulo, unue estas necese citi la teorion kreditan kiel nerefutebla principo de malnova madiĉino, ke la Koro estas la fundamento de la movforto de la sangocirkulo. Tiu ĉi teorio estas eltrovita de William Harvey, kortega kuracisto de angla imperiestro, antaŭ 320 jaroj. Ĝis nun neniu kuraĝis korekti la teorion, nek kuraĝis eĉ dubi ĝian verecon, Sed tamen, ĉu tio estas la vero, kiu estas neŝangebla por eterne?

En 1928-a mi la unuan fojon malkovris novan teorion de sangocirkulo. kiu estas la fundamenta vazo de mia saniga metodo. Ĝi konsistas en tio ke la movforto de la sangocirkulo devenas ne de pumpa funkcio de la koro sed de kapilareco en sangotuboj, kaj la kaŭzo de la kapilareco konsistas en vakua forto. Estas multaj klarigoj pri la vereco, ke la vera kaŭzo de la sangocirkulo estas la tirforto en la sangotuboj, kiel jene:—

1e. Tio estas la natura fenomeno, ke la homoj kaj aliaj bestoj falas en malbonan apetiton, kiam ili estas malsanaj aŭ vunditaj. Tio okazas nur pro tio, ke estu vakuo inter vejnetoj kaj sangotuboj.

2e. Se oni ĉesus manĝon, rekremento en la sango kiel karbonata acido aŭ histamino aŭ kolino, tromultiĝas. La vejnoj, por forporti tian rekrmenton kiel eble plej rapide, vigle, faras kuntirfunkcion. Tiu funkcio bone kaŭzas vakuon ĉe kuniĝpunktoj de la sangotuboj al la vejnoj. Tio sekve vigligas la kapilarecon, kaj por plenigi la vakuon rapidas la sango, kiu denove estas forpuŝata de kuntirfunkcio de la vejnoj. Tiamaniere la sangocirkulo okazas sinsekve.

3e. Ĉiu ĉelo vivas, kaj postulas puran kaj perfektan sangon.

4e. La ĉelo posedas aktivecon preni nutraĵelementon el la sango cirkulanta ĉirkaŭ si. Se la sango enhavus venenon aŭ bakterion, la ĉelo rifuzus la sangon. Kiel rezulto de tio, oni fariĝas senapetita.

5e. La sango konstruas karakteron kaj korpon de ĉiu persono. Kaj ĉar la venenitan sangon rifuzas la ĉelo, pulsobatoj malmultiĝas kaj pulso sen fortiĝas. Ĉu ne estas mallogike, ke al la koro estiĝas fortorigino, kiu cirkuliĝas la sangon?

6e. Per kio okazas la sangocirkulo ĉe animalo, kiu ne havas koron?

7e. Inter malaltklasaj animaloj estas tiuj, ĉe kiuj arterioj kaj vejnoj malfermiĝas en la ĉelojn.

8e. Kiamaniere oni povas klarigi la cirkuladon el patrina korpo al feto ĉe gravedo? Se la patrina koro estus malforta antaŭ la gravediĝo, ĝi tro laciĝus, tiom pli ĉe du aŭ tri-feta okazo.

9e. Laŭ ĝisnuna kompreno estas kredite, ke la sango, kiu estas kelkoble glueca ol akvo, estas cirkuligata dum 11 sekundoj tra 510,000,000 sangotuboj, kies diametro estas 5.5 mikronoj, 4,600-ono de unu colo, per forto de ŝrumpiĝo de la maldekstra korventriklo, kiu estas kvarono de la koro. Sed kiu povas klarigi ĝian verecon matematike?

10e. Se oni sekcas korpon, kiu mortis de infekta malsano aŭ de kronika malsano, oni travas la maldekstran korventriklon ŝvelanta kaj plena de sango. Sed al homo, kiu mortis subite de vundiĝo aŭ de apopuleksio, la korventriklo kuntiriĝas kaj estas malplena. Kiel oni klarigas la fakton?

11e. Ĝis nun oni kredas, ke la koro havas originan forton. Sed vidu la fakton, ke la kuranta tramo daŭre kuras, kiam elektro-livero ĉesas. Tio okazas de inercio. Ankaŭ elŝpruco de la sango arteria, kiu okazas je tranĉo de arterio, estas kaŭzata de inercio.

12e. Ĉirkaŭ 26 tagojn post gravediĝo feta koro fariĝas S forma, kaj post 6 semajnoj ĝia formo iom perfektiĝas. Sed oni ne povas vidi, ke ĝia funkcio estas la movforto de la sangocirkulo en la feta korpo. Oni povas kompreni la funkcion, se oni vidas la ekeston de kapilareco pro ŝveligo de la arterioj kaj ŝrumpiĝo de la vejnoj.

13e. Arteria tubo havas karakteron ŝveliĝi laŭ strukturo kaj nervodistribuo.

14e. Vejna karaktero estas kuntiriĝi laŭ strukturo kaj nervodistribuo.

15e. Se oni rigardus langon de rano mikroskope, oni vidas sangoglobetojn fluantajn en la plej diversajn direktojn, kiel muso kiu perdis la vojon. Per tio ĉi oni devas kompreni, ke la sango ne estas cirkulata nur de la kuntirfunkcio de la koro kaj la arterioj.

16e. Laŭ la teorio de rezistanco ĉe vejnaj tuboj, estas plej nature

konkludi, ke la koro nur prezentas sangujon por ĝustigi flukvanton de la sango.

17e. Se oni esplorus la homan korpon laŭ tiu ĉi teorio, en estonto oni certe ebligos la interŝanĝon de sana koro por la difektita.

18e. La fakto, ke fastado estas bonefika por preskaŭ ĉiuj malsanoj, devenas de tio, ke ĉe la kunigpunktoj de kelkcent milionoj da sangotuboj kaj da vejnetoj ekaperas vakuo. Tiu ĉi vakuo estas la origino de la movforto korpe kaj anime, kaj ne la koro. La koro kuntiriĝas, ĉar kelkcent milionoj da sangotuboj tiras la sangon el arterio per la kapilareco kaŭzita de la vakuo. Kiam la elasta arterio ŝveliĝas, en ĝin fluas la sango el la maldekstra korventriklo. La malplena korventriklo post la ŝrumpiĝo elprenas la sangon el maldekstra atrio. La granda eraro de ĝisnuna medicino kuŝas en tio, ke la maldekstra korventriklo liveras la sangon al la arterio per ŝrumpiĝo.

19e. Animalo estas malsata de naskiĝo. Tio estas vero biologia. Postuli nutraĵon estas nia instinkto komuna al ĉiu vivaĵo. Sento de malsato estas unu el la diaj aranĝoj de fenomenoj. Malsato kondukas nin al progreso, krimo, batalo, hommortigo, memmortigo aŭ al kanibalismo. La malsato ja estas la motorforto de ĉio.

20e. Estas vero, ke la fastado estas la plej bona rimedo por profilaksio kaj saniĝo de ĉiu malsano, sed ne erarkomprenu, ke oni fariĝus sana nur per malmultigo de manĝaĵo. Oni devas sekvi " Niŝi " metodon de fasta terapio, kiun mi mem iniciatis. Japana proverbo instruas, ke " al malsatulo oni ne devas doni rizaĵon sed kaĉon ". La kialo estas nur por eviti intestoobstrukco.

21e. Niŝi saniga metodo staras sur la fundamenta teorio, ke la vera movforto de sangocirkulo kuŝas on la kapilareco, kiu okazas en la sangotuboj distribuataj. 1,300,000-1,400,000 en unu kvadrata colo de la korpo, sed ne sur la malnova teorio, kiu insistas, ke la movforto kuŝas en la pumpa funkcio de la koro.

22e, Tiu, kiu instigas la funkciadon de ĉiu homa organo krom la koro, estas vaga nervo. Simpatiko kontraŭe efikas por ĉesigi la funkciadon de la organo. Tiuj ĉi kontraŭaj nervoj laboras ĉe la koro tute alie ol ĉe aliaj organoj; simpatiko instigas koro-funkciadon, kaj la vaga nervo kontraŭas la simpatikon. Unuvorte, la funkciado de la du nervoj estas tute kontraŭa inter la koro kaj la aliaj organoj. Kiamaniere oni kuraĝas klarigi tiun ĉi kontraŭecon laŭ la malnova teorio? Se laŭ mia nova teorio de la sangocirkulo, tiu ĉi kontraŭeco estas facile klarigebla.

Laŭ kalkulo de Martin Vogel, la nombro de homaj sangotuboj estas 510,000,000. Se ĉiu tubo havas 20 da sangopremo, kiel granda estas la tuta sumo de la sangopremo! Ĉu oni povas konjekti, ke la koro posedas tiel grandan forton?

Mi klarigas alie; Vasteco de arterio tuj apud la koro kaj tiu de tutaj sangotubetoj kaj tiu de vejno tuj antaŭ la koro, en ordinara stato, havas proporcion de 1 : 800 : 2. Kiam oni faras korpo-ekzercon, la sumo-vasteco de la tutaj sangotubetoj eĉ triobliĝas. Kiel oni jam diris, la vejnoj laboras per sia kuntiriĝo. Kaj se karbonata acido aŭ histamino venus en la vejnojn, la ŝrumpiĝo de la vejnoj vigliĝas kaj puŝas la sangon rapide al la koro. Kontraŭfluo estas malpermesita de valvoj en la vejnoj.

Tiamaniere la sango estas sendata, ekokazas vakuo ĉe la kunigpunktoj de sangotubetoj al la vejnetoj. Kaj la vakuo siavice tiras la sangon por plenigi la vakuajn spacetojn. Ĉe tio ekokazas la kapilareco.

La ĉeloj de nia korpo estas nutrataj de la sango. Se la sango enhavus en si venenigan substancon pro malsano aŭ eniras en sin veneno el ekstero, la ĉeloj rifuzas la eniron de la sango. Tio estas la kaŭzo de malbona apetito, kiam oni estas malsana. Laŭ la nuna medicino oni estas maltrankvila je malboniĝo de la apetito, kaj timas mankon de nutraĵo. Kiel kontraŭnatura estas tio! Kiel dirite supre, la vejnoj, per helpo de valvoj, sendas la sangon al la koro. Tial d-ro Laubry nomas la vejnon dua koro. La vejnoj okaze ŝveliĝas pro troa livero de nutraĵo aŭ de alia kaŭzo. La ŝveliĝo de la vejnoj unue difektas hepaton. Sekreciaĵo de la hepato estras peristaltan movon de intesto, kaj tial la difekto de la hepato tuj influas la funkcion de la intesto, al kiu ekokazas paralizo aŭ ŝtopiĝo. Al tiu difekto sekvas la ŝveliĝo de la sangotuboj en la cerbo, kio estas la kaŭzo de sangado en la cerbo.

Cetere, la fundamenta teorio de kuracado de malsanoj kuŝas en la formigo de la vakuo. Por tio malsatigado, t. e. fastado, povas esti la plej bona rimedo.—Tamen estu prudenta, ĉar senzorga fastado estas tre malbona. —Fastu nur laŭ mia metodo, aŭ manĝu agaragaron por mallonga fastado okaze de malsano. La agaragaro posedas nenian elementon kiel nutraĵon, sekve oni malsatiĝas. Sperti malsaton estas tre grava por la korpo. Inter la homoj estas tiuj, kiuj havas difektojn denaskajn, aŭ tiuj kiuj havas nekonatajn malsanojn. La fastado ne nur rimarkigas al la fastantoj tiajn difektojn, sed forigas ilin. Ĉiu vivaĵo estas malsata denaske, kaj deziras lakton de sia patrino. Ĉi tiu deziro al la manĝo estas la unua paŝo de nutrado de la korpo.

PLIMULTE PRI ESPERANTAJ ETIMOLOGIOJ (II)

HUDITA-Syuzo

agnosk-i *agnoscere* (L), derivita de latina *ad-* (adicii) kaj *gnoscere* (rekoni).
Rim. Ne konfuzu ĉi tiun radikon kun *agnostik-a*, kia etimologio estas *agnostic* (A), aŭ *anostique* (F), kiuj devenas de greka *ἀ* (ne)+ *γνωστικός* (konanta), kaj sia signifo estas dubema al la konebleco de Dio.

-end- Eble el latina konjugacia sufikso *-endum* de *dividendum*, kiu estas neŭtra de la gerundivo de latina verbo *dividere*. *Dividend* angla vorto el la sama radiko, signifas nombron aŭ kvanton, kiu devas esti dividata, aŭ estas div*idenda*.

frez-i En rusa lingvo *freza* (фреза) estas frezilo. Eble la verbo estas farita de la rusa vorto.

-ing- Kunmetante du radikojn »fingro« kaj »ringo«, Zamenhof faris novan vorton *fingringo*, kiu signifas »ĉapeton, en kiun kudrante oni enmetas la ekstremaĵon de fingro por ĝin ŝirmi.« (P. V. de SAT) Forigante *fingron* el *fingringo* restas *-ing*, kiu estas farita je sufikso »signanta objekton, en kiu unu alia objekto aŭ membro estas parte enigita kaj fiksita, ĝenerale per sia ekstremaĵo.« (P. V. de SAT)

fingro+ringo=fingringo

fingring−fingro=*-ing*

Rim. *fingringo* similas ortografie al la angla *fingring*, tamen ili ne estas de sama signifo aŭ sama etimologio. Aŭ *-ing* tre similas al la angla sufikso *-ing*, kiu estas la konjugacio de participo prezenca. Sed ĝi ne havas la sencon, kiun la esp-a vorteto havas. Ne konfuzu.

jen De germana *jener*, demonstrativa pronomo, uzata adjektive, signifanta »tiu«, estas farita esperanta adjektivo *jen-a*. Forigante adjektivan finaĵon *-a*, fariĝas *jen*, kiu signifas »vorton, uzata por montri ion proksiman el la spaco aŭ en la tempo.« (Kabe)

kokr-i estas »trompi sian edz(in)on« (Plena Vortaro de SAT). Mi ne povis eltrovi proksimuman radikon en nacilingvo. Vidu ĉi-suban diagramon.

kokrita edzo....*cocu* (F)=*Hahnrei* (G)

cock (A)=*coq* (F)=*Hahn* (G)

kok-o (E)+*r-i*

kokr-i (E)

Hahnrei (G) kaj *cocu* (F) signifas kokritan edzon, kaj *coq* (F) kaj *Hahn* (G) estas koko. Tial *kok-*, kiu devenis de *coq* aŭ *cock* (A), kunigante *-r*, kiu venas de germana sufikso *-rei* de *Hahnrei*, fariĝas esperantan radikon *kokr-i*.

munt-i *monter* (F) *mount* (A). Franca *monter* korespondas al la senco. Ĉar la radiko *mont-* havas alian signifon, *munt-i* estas farita anstataŭ *mont-i*. Antikva anglosaksa estas *munt*. Tial se oni prenas *u* anstataŭ *o* en la silabo, tio ne estas senrezonebla.

Pri Personaj Pronomoj

Ĉiuj personaj pronomoj havas *i* por iliaj finaĵoj, tial ili havas konforman konstruadon. Kaj iliaj komenciĝantaj literoj havas devenon en nacilingvoj, kion oni vidus en ĉi-suba klarigo.

1-a persona ununombra *mi* de *me*, *m*oi, *m*a, *m*on, *m*es (F), *m*e, *m*y, *m*ine (A), *m*e *m*ei (L), *m*ij (Fl. Ned), *m*ig (N), *m*ine (Rum), *m*ein, *m*ir, *m*ich (G).

multenombra *ni* de *n*ous, *n*otre, *n*os (F), *n*osotros (H), *n*oi (I), *n*us (Rom).

2-a persona ununombra *ci* de *t*i (Ab), *t*hou, *t*hy, *t*hee (A), *t*u, *t*oi (F), *t*ú (H), *t*e (Hun), *t*u (I. Lat), *t*y (P. Slov. Ĉeĥ), ти (Serb. Ukr), *t*u, *t*une (Rum), ты (R).

Rim. Nacilingva *t* ofte ŝanĝiĝas al *c*. Tial *ti* aŭ similaj silaboj foriĝas je *ci*.

multenombra *vi* de *v*ous, *v*otre, *v*os (F), *v*osotros (H), *v*oi (I), *v*us (Ram), *v*oi (Rum), *v*y (Ĉeĥ. Slov), ви (Ukr. Serb).

3a persona ununombra vira *li* de i*l*, *l*ui (F), eg*l*i (I), el (Rum. Rom).

virina *ŝi* de *sh*e (A), zij (Ned), *si*e (G).

neŭtra *ĝi* por tiu ĉi vorteto mi bedaŭrinde ne povas elpensi ĝianlingvistikan bazon. Gesamideanoj bonvolu sciigi min pri ĝia etimologio!

multenombra *ili* de *il*s, e*ll*es (F), e*ll*os, e*ll*as (Rom), *ill*i (L).

resenda pronomo *si* de *s*i (H. Ĉeĥ. Slov), *s*e (F. H. Rum), *s*ig (Nv.

Sv), *sich* (G).

nedifinita pronomo ***oni*** de *on* (F), *one* (A).

ŝkot-o Angla *stock* havas multajn signifojn de kiuj estas: 1. disponeble kvanto de varo, kaj 2. tenilo de ankro. Por unua signifo tiu ĉi vorto estas esperantigita kiel *stok-o.*

Por la dua, diferencigi el unua signifo, ĉi tiu vorto estas esperantigita kiel *skoto,* interŝanĝante *t* kaj *k.* Sed *skoto* estas la nomo de la popolo (*Scot*) loĝanta en la norda parto de Britujo. Diferencigi el tiu ĉi signifo oni ŝanĝiĝis *s* al *ŝ*, kaj tiel fariĝis nova radiko *ŝkoto.*

Preseraro (R. O. N-ro 11)

				正	誤
p.	22,	(1.)	14.	gi	*i*
	„	„	16.	*figuier*	*figuiere*
	„	„	29.	*ui*	*uj*

エスペラントの歌を歌ふ

秋山日出夫

今回エスペラント學會に依つて計畫、募集當選歌發表にあたり私共リーダーターフエルフエラインが此の發表並びにレコード吹込をお引受いたしましたが、責任の大いなるを思ひ、學會の岩下氏並びにエスペランテイストであり私共メンバーの一人である安井君の發音指導によつて、兎も角コロムビア吹込を終了、其の結果は心配ながらどうやら終つたといふ氣安を感じてゐます。あと大會(廿一日)を控へてメンバー一同張切つてゐます。元來私共團體が素人のみの寄合であり十三年の間此の種の合唱運動によつて體得したことが家族的であらねばならぬ、氣安く氣兼のない寄合であらねばならぬといふ事でした。それが丁度岩下氏から聞いたエスペランテイストの方々が世界に本日をあらしめ奮勵邁進されつゝある現在のゆき方と何かしら私共の合唱運動と相通ずるものあるを思ひ今回の此の企に對して心からなる感謝と敬意を拂ふものであります。

エスペラントによつて歌をうたふ、勿論メンバー一同初めての事でしたが、當選歌の安易な事そして私共日本人には他國語のどれよりもエスペラントが親しめる樣な氣がして氣安く練習が出來ました。獨逸ではベートーベンの第九すらエスペラントによつて發表されたとか聞いてゐます。何卒學會の發展と共に、大衆に喰入る力最も良き指導方法として私の信ずる合唱による運動も先々お心に掛けられて御發展の一助となされん事をお祈り申上げます。

エスペラント發表五十周年記念募集歌曲當選作

これは11月號で發表した一等當選曲です。第25回日本エス大會第1日の席上東京リーダー・ターフェル・フェラインの合唱によつて發表され，コロンビア・レコードに吹込まれてゐます。

Al la Fratoj

—L.L.Zamenhof—

壯重に M.M. ♩=96
Kun majesteco

飯田信夫作曲
Nobuo Iida



mf

1. For - te ni sta - ru, fra - toj a - ma - taj,
2. Re - gas an - ko - raŭ nok - to sen lu - no,
3. Ve - ku, ho ve - ku, ve - ku kon - stan - te,
14. Glo - ra la ce - lo, san - kta l'a - fe - ro,
15. Ti - am a - ten - das nin re - kom - pen - co

mf

Por ni - a san - kta a - fe - ro!
La mon - do dor - mas ob - sti - ne,
Ne ti - mu ri - don, in - sul - ton!
La ven - ko—bal - daŭ ĝi ve - nos;
La plej ma - jes - ta kaj ri - ĉa:

Ni ba - ta - la - du ku - ne te - na - taj
Sed jam le - vi - ĝos bal - daŭ la su - no,
Vo - ku, ho vo - ku, ri - pe - ta - dan - te,
Le - vos la ka - pon ni kun fi - e - ro,
Ni - a la - bo - ro kaj pa - ci - en - co

Per u - nu be - la es - pe - ro!
Por lu - mi, bri - li sen - fi - ne.
Ĝis vi a - tin - gos aŭs - kul - ton!
La mon - do ĝo - je nin be - nos.
La mon - don fa - ros fe - li - ĉa!

JUBILEA READMONO

al la 25-a Kongreso de Japanaj Esperantistoj

Poezio de I. U.
Muziko de Cuneko Sato

Andante

Tra de - zer - to e - rar - va - ĝis ni jam kvin - dek

ja - rojn, Ni sur - pa - ŝis kru - tajn ro - kojn

kaj la sa - blajn ma - rojn, Nun ni sta - ras

Jubilea Readmono 2

sur la bor-do de la pas-ri- ve - ro.

Kaj mo- men-ton ni ri - po-zas post la long-su-

mf

fe - ro Trans la on-doj an-taŭ ni jen

mf

Sub la- zur- ĉi- e - lo Ku-ŝas kam-po

Jubilea Readmono 3

Ki - e flu - as lak - to kaj mi - e - lo.

lon - gan vo - jon re - me - mo - ras ni nun, ho kun

lar mo; Tu - tan tem - pon ni su - fe - ris

Jubilea Readmono 4

je mal sat. mal- var - mo, I am ba - tis

n-n ven - te- goj sen ri - fu- ĝaj lo - koj

- Aŭ a - pe - naŭ ni el mor - to sa vis nin ĉe l'

mf

ro - koj. Sed el ĉi - uj ĉi tur - me - toj

mf

Jubilea Readmono 5

la plej a - kra ba - to — Ti - o es - tis

mal - kon - fi - do in - ter la ge - fra - toj.

Più mosso

mf Sur stan-dar-do de l'Es-pe-ro Kaj Pa-cienc' ob-sti-na

mf

Jen mal-ga-ja Majstr' al-do-nis „la Kon-kor-don" fi - na.

Jubilea Readmono 6

p

Nun ne sta-ras Li gvi-dan-to, an-taŭ ni ar - me - o,

p

cres . . . . cen . . . . do . . . .

Sed Li vi-vas in-ter fra-toj des pli en re a - lo.

cres . . . . cen . . . . do . . . .

mf

Lin me-mo-ru, Lin ple-nu-mu; Ve-nit Ju-bi - le - o!

mf

f

poco rit. Grandioso

Rea-li-gu re-ad-mo-nojn, Fra-te-co, Justeco, E-ga - lo!

f

poco rit. crescendo

ff

大會規約神戸案に關して

——相澤君に答ふ——

神戸エスペラント協會

本文は直接相澤君へお答へすべき處本誌十月號に君の私見が公開せられたるを以て再びR. O. 誌上を拜借せる次第なり。

神戸案に關し本誌上に堂々私見を發表し其關心の程を示したる相澤君に深く敬意を表す。望み得べくんば君の蘊蓄を傾け改良案の具體的提示若くは改良すべき缺點の指摘示唆を希求せる次第なるも單に疑點を擧げ指導を乞ふと述べられしのみならば又已むを得ざりしなるべし。

神戸案の骨子は

一、議決權　　　二、代表機關　　　三、前寄付金

の三項主要分子に相違無きも、四、開催地及招請者の問題も亦等閑視すべからず

神戸案は貴說の如く實行に當りては相當の忍耐を要す。かゝるが故に本案は新奇を好む新人諸君に歡迎さるを目標とせず余輩の如く數年若くは二十數年來 Persisteco を唯一の武器として運動に從事し來れるものを對象とせり。余輩の觀測によれば余輩と共にエス運動に參加せる當時の書生連は今日に於ては兎に角一人前の市民となり、運動の方面に於ても各地の中心人物或は Patrono として存在せる現狀に鑑み、其朋輩も余輩と一味の觀念を有すと信ず。故に神戸案も從前ならばいざ知らず現在に於ては既に實行の時期に到達せりと思惟す。此點君との間に見解を異にす。卽ち本案は實行の機熟するを待ちたるものにして更に作文の爲に數星霜を閱したるに非ず。

議決權所有者に關して

議決權を金錢にて購ふが如き感あるを以て不愉快なりと迄は極言しあらざるも、しか謂つべき意識潜在せる如く思惟せらるゝが、そは理解の本末を轉倒するものなり。

議決權を所有せんとする程の者は先づ地方會に關與し以て地方のエス運動に戮力し且は又大會を支持すべく誠意の象徵として前寄付を行爲に顯現すべしと理解せよ。

個人エスペランチストは地方會內の輿論を自說に導き尙大會に參加して諤々の辯を振ひ堂々論陣を張れば足る（第十三條參照）以て議決權無しと雖も充分所信を徹底せしめ得る。斯くて大會は全エスペランチストの總意を反映し得るには非ずや。然るに從來の如く出席者のみの議決に委すとせば如何に多くとも數百人の意に過ぎざるべし。何づれが大會をしてより完全なる最高合議機關たらしむべく選ばるべき制度なりや論を俟たず。

又既に前寄付制度を採用せる大會に臨むとせよ。一個の地方會とも稱すべきものが僅々五口の寄付を爲さざるが如き事想像し得るや。新興會ならば一ヶ年待つ寬容なるべく若干の個人に議決權無しの故を以て立騷ぐは餘りにセンチならずや。

尙提案は第三十五條により會開催前に發表されおるを以て個人は充分地方會等に於て討論し得、此點合せ考慮すべし、特に代表機關は自己の機關誌に此提案事項を發表すると同時に自己の所信を披瀝し得るを以て殆んど輿論を支配し得るには非ずや。

有議決權代表は一單位に付一人一票なり。

之に關し未だ疑義あるを聞かず、貴見に疑義ありと聞きて余輩恐愕せり。余輩は斯の條文を

以て足りと信ずるも尙不安ならば第十五條及第十六條に夫々但書を設けて「代表ノ議決權ハ一名＝付一票トス」「代表ハ一單位＝付一名トス」と蛇足せば可ならん。自信とは余輩の勝手なる言ひ分にして之を側面より觀せば愚鈍なる余輩の事幾年かゝり作文せるとせんも此程度の瑕疵あらん、余輩の希望せるは此種原理に對する具體的改造意見なり。

とまれ貴君をして「禍を後世に殘すべし」と迄慨嘆せしめたる事につき余輩甚だ以て遺憾となす。君にして多額の前寄付を爲すとも不都合なる野心あらば懇眼なる準備委員は之を洞察し第三十二條を適要すべき仕組なる事を銘記せよ。

委任狀は大會を支持する地方會にして都合により代表を派遣し得ざる場合、他會の代表に委任するものなり、無論旣提案事項に關して會の間に意見を異にする場合もあるべし、夫は已むを得ざる次第にて別に不都合なるに非ず、此點無理算段し委任狀をかき集めて出席するインチキ會社の總會とは自ら形態事情を異にするものなり。唯受任者は有議決權代表に限るとしたるは將來重要議案審議の際、代表として出席する程の者に委任する方が寧ろ確實なりと考ふる所以なり。委任狀を認めざれば變な事になるとは萬一出席代表少數に過ぐる虞あらんを考慮せるものなり。

代表機關の每大會選定は固執せず

代表機關の選定は每大會にを爲すの絕對的理由無しと雖も故無きに本條を挿入せるにはあらず。卽ち大會の實狀を見るに參加者は年々相當量新陳代謝をなす。此新參加者の面前に於て代表機關に關する若干の說明、感謝選定及將來の委囑を爲すは大會の行事的莊嚴を深め構成美的藝術味を豐にする意義あり。其爲に時を借すに二十分もあらば事足其煩に堪えずと作言するが如き事あらんや。

貴君の憂慮せる如く萬一代表機關の選定に關し議場紛糾するが如き時代到來するとせばそは日本エス界の昏迷に非ずして蓋し黃金時代の出現ならん。

代表機關の每大會選定に關聯し神戶の輩は殊更に學會の實力を無視し或は學會に對抗する機關の出現を慮るものゝ如しに至つては余輩又以て何をか云はん。

前寄付金の意義

之は漫然たる寄付に非ず、各會が大會を通じてエス運動の資金を調達する意義を有す。然るに其第一步より餘りに大仕掛の計畫を樹つるは無理なるべしと思惟し先づ大會費用の醵出より出發せる次第なり。各會の努力により多額に集積し得る時期にも到來せば之をドシドシ代表機關の運動資金に充當し以てエス運動の擴大强化に資せよ。要するに此方法を大會の一計畫として行ふ豫定にて立案せり卽ち大會招請者側に於て前寄付金の費途に付大體の豫算案を提出すべき理由の一なり。

因に前寄付とは何處其處に大會が開催せらるゝの故に爲す或は爲さずと云ふ代物に非ずして、各會が小にしては大會、大にしてはエス運動の爲に醵出し、各會が聖戰の資金の一部を分擔する賦課金に外ならず、よつて議決權にも關聯し、金額につきても整理とのみならず實用上の見地より相當の制肘を受くべき結果となりたり。

學會第一主義

至極結構同慶に堪へず。貴君は曲解せるが如きも余輩も亦學會第一主義なり。唯合法的の手順を經て之を達成せん事を願ふのみ、卽ち大會は全國內唯一の協議機關なるを以て、大會の決議を經て學會を代表機關と呼びたき念願に外ならず。全國的協議機關の決議による代表機關とは卽ち中心機關の事なり。

成員の決議的支持無きにも拘らず中心機關なりと稱するは勝手なれ共自然にして飽迄合理的なるには非ず。

學會第一主義者の一形態に財的支持法を講ぜずして一にも學會、二にも學會と、學會へ註文と仕事のみ持ち込み以て學會をして悲鳴を上げしむる向あるが如きも、學會の悲鳴とは取りも直さず在京同志の悲鳴なるが、此點を是正するにつきても相當考慮せるは神戸案の內包せる必要なる點なり。よろしく再檢討を希望す。

全國に散在せるエスペランチストは數萬を下らざるべし且恐らくは總て學會の支持者ならんも實際の學會の會員數は僅々其一割にも滿たざる現狀は何を語るものなりや、此現實の中に於て端的なる又感傷的なる學會第一主義を主張するは余輩の全く採らざる處なり。

先に岡本君が發表せる第一主義は實力養成に其基礎を置きたるが如し、之は岡本君にして始めて主張し得る事にして余輩は彼と同じ目的の爲に大會なる他の重要なる機關を極力運用し得るが如く規約案を勘考せるのみ。

少數の協會員或は學會員のみエスペランチストとして存在せる二十數年以前ならばいざ知らず今日に於ては多種多様の意味合にてエスペランチスト儼存す、此大衆を統制し以て一の學會の下に歸屬せしむる爲には相當の手順を經過すべきものなりと信ず。

今單に大會と學會總會とは同じ意味のものなるかの如くに考ふるは認識不足なりと斷定す、且上記二者が同意味に非ずと理解する者を學會に對する反逆者なりと解するは餘りに感傷的にして余輩唯々茫然たるのみ。

締論として貴君は大會規約は慣例を若干整理成文化せば足り飛躍的因子を要せず歷史は云々と特記せり、此點に關して同意見の同志も多々あらん。要するに見界の相違にて致し方無き次第なれ共、余輩は決して之に滿足する事能はず、遂に議案を起草し以て輿論を喚起せんと努力したるものなり。

唯余輩の異とする處は劃期的規約を要せずとの意見ならば何の故を以て劃期的規約を要せざるやの根本諸點を强調せば足り敢て神戸案の末節に渉り研究の要なきが如し。

惟ふに貴君は此度神戸案中の疑點研究に名を藉り、之を排撃せんとしたるは余輩の抱懷する學會第一主義を異色の危險思想と誤解し學會擁護の爲奮起せられしには非ずや。

以上率直に所信を披瀝し貴見に答ふ。

以上

記念大會漫步記

九ケ國會議が、歐洲で開かれたが、餘り振はない中に、日獨伊防共協定が成立し、街々の店頭裝飾に、ハーゲンクロイツと伊太利の國旗が日の丸と共にかざられてゐる。ニュース映画場の前には、人々が長い列をつくつてゐる。

こうした歷史的な時代の中に、エスペラント運動史上に於いても亦歷史的な第50周年記念、日本エスペラント大會第25回を、日本の首都東京で開くことになつた。11月の中旬から、始められ帝都の燈火管制のため、大會準備の中心、日本エスペラント學會も、黒幕が階下の硝子窓全部にはりめぐらされ、11月の氣候ではあつても、暑苦しい感じである。この中で大會役員は連夜いかにも非常時下の大會にふさわしい準備に忙しかつた。幹事長の小坂氏は、時局で多

忙の中を毎夜役所から學會に足を運ばれて、幹事、その他の係員を指導した。Kongreslibro の編纂、晝餐券、レコード券等の作製まで小坂氏の手によつてなされた。一方三宅書記は會場、其他の雑務の責任を一手に引受けて、手や足が何本あつても足りない有様。

大會の前日

いよいよ大會も明日に迫つて、學會には人がハンランした。東大醫學部のエスクラピーダグルーポの同志が主になつて、伊藤己西三氏の指揮の下に、會場の飾りつけ、その他に必要な設備の配置に、神田今川小路教育會館で大童。5時を廻ると、晴れた秋空もやうやく、周圍の物がハッキリ見わけがつかない位の光線になつて了ふ。電燈をつけることを禁止されてゐるので、うす暗闇の中で、モザウ紙に墨汁の筆を走らせる。遂にあたりは眞黒になつて、引上げるために、インキのフタを搜すので、新聞紙に火をつけて、床の中をはふ騒ぎ。

つきあたりさうになる自轉車、威嚇するような強烈な自動車のヘッドライト、の間を縫つて學會へ。こゝでは人々が右往左往。輪轉機を廻す人。ソロバンをはじく人。封筒に何やら書きつけてゐる人。Mandato を書き上げてゐる人。翌日の Saluto の原稿に頭をひねつてゐる人。悠然と談話にふけつてゐる人々。しかし一番澤山の人々が動員されてゐるのは、出席者に手渡す狀袋入れの仕事だ。8時を過ぎてヤット出來上つて來た、記念大會メダルは一同を喜ばせる。銀の地に、日本の地形と、世界の地形が浮いてをり、綠の星がその中央上に輝いてゐる。この構圖は常識的だけれど、ひどく人々の心に美しさを與へるものがあるようで、大評判だ。この記念メダルが欲しい人は日本中の同志の中に相當あるだらう。出席しなくても、このメダルを胸にかざるために參加申込をした同志もあるとか。300人を突破しようとしてゐる申込み。この出席者に手渡す狀袋に、メダル他品々を入れこむのに一仕事。こうした澤山の人々の顔の中に、ハルバル地方からやつて來た同志ノ顔が見える。大阪の川崎直一氏、石川縣の竹内藤吉氏、大分の小野田幸雄氏、金澤の吉川友吉氏等々。一歩外へ出ると暗闇だ。こうして大會の前夜はふけてゆく。

第1日（11月 21日　日曜日）

この朝神田今川小路の教育會館講堂へ、第25回日本エスペラント大會に出席すべく人々は急ぐ。婦人聯盟の同志が受付に頑張つて忙殺される。

綺麗に新しく壁をぬり立てた會場正面に日の丸の旗と、綠の星がはられてゐる。場外の受付のあたりには本年の大會が記憶すべき事實の一つとして、實業エスペラント分科會の努力により集められた、エスペラント語を實用した品々の展覽された机がならんでをり、その中の一部は賣品だ。Jubileo と金文字を刻印する fonto plumo や、Al la Kongreso と書いた汽車の玩具。Haŭto Sauiga の「鹼」紙ナイフ。藥品等々。賑かな店開きだ。この中をベートヴエンの第六シンホニーが、力强い擴聲器を通じて快調に流れ、會場外にあふれて、開會を待つ參加者の心に喜ばしい感情がたゞよふ。

それと共に «Al la Fratoj» の

«Forte ni staru fratoj amatoj
Por nia sankta afero! ....»

のメロデイオが、新鮮な協力の精神を皷吹する。

參加者は遂に 300名を突破して、「君が代」の日本語齊唱によつて、大會は開かれた。このことは最近にない事實である。大會組織委員長美野田氏の挨拶。エスペーロの合唱は聲高らかに歌はれた。大會會頭、大石和三郎氏の演說、副會頭、藤澤氏の flua parolado, 各代表の挨拶。

この後「エスペラント運動功勞者」の表彰がとり行はれた。月本喜多治、千布利雄、福田國太郎、Edward Gauntlett, 黒板勝美、武藤於兎、野原休一、丘淺次郎、高楠順次郎、高橋邦太郎の諸先生の名が、大石會頭によつて呼ばれ、萬場強い拍手をもつてこれに讃美を表した。それから開會の最初から演壇に座をしめてをられた、月本、野原、丘、高橋(代理)氏の pioniroj に、夫々 Ora Medalo が贈られた。力強い拍手はしばし續いて、輝かしい先輩の過去の功績をたゝへた。

晝餐を急いですませて會場へ戻る。

「リーダー・ターフエル・フエライン」合唱團が登場する音樂會だ。«Al la Fratoj» の懸賞募集から、レコード吹込みまで、陰に陽に盡力した岩下順太郎氏が、モーニングの正装で、同フエラインの紹介を面白くやる。«Kanto de l'Ligo»。日本語の三つの歌。こゝで拍手、又拍手。アンコールで、十數名の membroj は再び登場。軍歌を歌ふ。少憩の後、呼物の «Al la Fratoj». エスペランチストの兄弟達の心をむすびつけるザメンホフの精神がこのメロデイーオによつて、更にひしひしと迫る。伴奏は川村信一郎氏。

作曲した飯田氏に寄贈するザメンホフのブロンズ像が、ピアノの上に、飾られてあるのも懐しい。

2.30 から「學會維持員總會」。

小坂氏座長席につき、來年度の計畫として、Revuo と Lernanto との合併を語る。三石氏の會計報告、三宅氏の事業報告、久保氏の後援會報告、意見、質疑應答に入り、色々な希望が開陳される。「Revuo と Lernanto の合併により、Ŝparita parto de la membra kaso を en la rilatoj kun la Kongreso kaj ĝenerala movado. に振り向けられたし」との進藤氏の希望。「事局を反映して、エス運動の促進をはかられる方法なきや」、との多羅尾氏の意見等々。仲々の活潑な議論が展開し、非常時を思はせる。

3.30 から 協議會

1934年長崎の大會で成立した、「大會規約制定に關する特別委員會」の報告が、進藤氏からあり、大會の議事進行規約を發表し、贊成を求める。多くの質問討議の後可決。その後この委員會を (1) 解散 (2) 存續 (3) 改造の點で、これ又論戰。擧手による投票で、存續に決定。

燈火管制下の夜がせまつて來たので、プログラーモの「エス文献の増加方策」「學校に於けるエス語の採用」は意見の交換が行はれなかつた。

第 2 日 (11月22日 月曜日)

分科會の日。敎育會館にて。

佛敎、キリスト敎、文學、科學、實業、婦人、電氣、學生、敎育、鐵道、の 10分科會が開かれた。藥學は前日別の場所で行はれた。實業分科會は磯崎氏等の前々の準備すばらしく、出席者も部屋一杯で、熱心に討議した。恐らく實業方面に於けるエスペラントの活用をこれ程高く認識しようと試み、その努力をした、實業分科會は本大會の一つの特徴と云へよう。國際エス聯盟の delegito の會合もこれと時刻を同じうして、同會場に待たれた、非常時下に於ける國際的な delegito の組織であるから愼重なしかし深い意見の交換が行はれた。

尚注目すべきことは、佛敎、キリスト敎、敎育の三分科會に於いて非常時局にあたり、エスペラントを大いに利用すべしとの決議がなされたことである。

第 3 日 (11月23日 火曜日 祭日)

この日も第 1日同様快晴。大會大學。

«Vivo kaj Senvivo de la vidpunktoj de ĥemio» と題し、今年初頭フランス留學を終へて歸朝した江上不二夫氏が專門の研究を、流暢な力强いエスペラント語て發表。

「動詞 Timi の用法に就て」文法研究の大家佐々城佑氏が日本語で講演した。timi がザメンホフの著作の中で如何に使はれてゐるか、豐富な引用例をもつて説明、聽衆の興味をよび起した。

«Pri la sangotipoj». Dro 淺田一は、法醫學の泰斗。この人のこの研究がエス語で話されることは仲々にない機會と一同耳をそばだてる。

晝餐會は軍人會館で。出席者 120 人。

再び敎育會館の講堂へ歸つて、分科會の報告、進藤氏の IEL の報告、言語委員、川崎氏の報告がある。

尙大會間際に、金澤の瀬川氏から「世界に時局を認識させるためエス文のパンフレットを作製せよ」との緊急動議があつたが、之は從來の大會の慣習から云つて豫め定められた期限迄に提出され Kongreslibro に印刷された提案以外はとり上げないことになつてゐるので上提されなかつたが、その手紙は書記の手によつて、閉會式の終りに朗讀された。又靜岡の高橋氏の印刷物も書記によつて朗讀された。

それからお別れの會として、出席者の中で、各地で活躍されてをる同志の名が、司會者石黑氏によつて、紹介され、各々立つて會衆に顏見世をする。なごやかな狀景。

«Espero» をのどもさけよと歌つて、25 回記念大會の幕は閉じられた。

燈火管制のとかれた明るい光の街へ、散會した同志達は夫々思ひ思ひに歸つて行つた。

(S. K.)

☆大會で拾つた話☆

★エスペラント50周年 第25回日本記念大會だと云ふのに一つ、淋しいものがあつた。それは Vortaristo であり、前學會書記長岡本好次氏の顔の見えないことであつた。岡本氏は第8回東京の大會から 17 回 17 年間一回も缺かさす大會に出席してゐるレコードホールダーである。今春京城に赴任されたため、あの懐しい姿を見られなかつたことはかへすがへすも殘念であつた。

★«Al la Fratoj» 發表は大會の呼び物だつた。ところで、學會で、大會の始まる十數日前、三石理事と久保評議員がこんな會話を交換してゐた。

K「Al la Fratoj のレコードは何枚賣れると思ひますか」。M「サア、50 枚も賣れるかな。50 枚賣れたら大したものだ」。K「僕は 100 枚位はたしかに賣れると思ひますよ。」事實はこの二人の豫想を裏切つて、大會期を通じて、第一版 200 枚が殆ど賣切れ、學會は追加を註文したと。

★大會に際し、日本書記エス譯、第三編が新しく出版された。野原氏は Ora medalo を大會で貰ふたが、一方同時にこの活躍は青年エスペランチストも顔まけがする程だ。

★開會式の Saluto の際、進藤靜太郎氏が IEL の手紙を朗讀しようとしたら、書記の方でそれを紛失して了つた。進藤氏演壇に立つた際 "Internacia letero perdiĝis. このことは時勢を諷刺する興味ある出來事だ" と語れば、一同頗る複雜した顔をする。

★第1日目の會場ではマイクロホンの設備があるために低聲の報告、演說でも充分きゝとれて好評サクサク。

★大會が終つたあとで、大阪と東京其他の有志が晩餐をともにし杯のやり取りを重ね舊交をあたゝめた。快談の後、散會。某氏の歸る先はときくと、その名は嚴格なり、禁酒ホテル！

近衛首相演說
エス譯

今次事變に於ける日本の立場を海外の同志へ理解せしめる爲に 72 議會に於ける近衛首相の演說がエス譯され **Orienta Kulturo no. 5.** に掲載されてゐるが、尙一般の希望により之を拔刷し希望者へ無代配布することになつた。(但し五部毎に送料四錢を添へること)大いに利用されたい。

申込先—東京駒込動坂 338——**東洋文史研究所**

全國各地報道

投稿注意：

1. 日本文にて・四〇〇字詰原稿紙二枚以內。
2. 締切大體每月 15 日（15 日以後到着のものものせることあり）。
3. 地方會誌を以て報道に代ふるをえず。
4. 寫眞は裏に必ず何の寫眞かといふ說明記入の事。寫眞は返送せず資料として保存す。

東京

★東京エスペラントクルーボ——1937 年度に於ける我が T.E.K. の活動を、玆にふり返つて見やう。◇2 月 17 日學會監事、T.E.K. 幹事堀眞道氏送別會。◇3 月 19 日江上不二夫氏歸國歡迎會。 3 月 26 日學會書記長岡本好次氏送別會。◇7 月 26 日エスペラント發表五十周年紀念晚餐會。◇11 月 21, 22, 23 日、日本大會。これがその概觀である」……

T. E. K. の活動は日本のこの種のエス運動の縮圖をなすものである。吾々は之に據つて運動の全體を窺ひ知ることが出來る。

★Scienca Rondo——帝大理學部內 S.R. は理研有志と提携、每週 1 回火曜午後 4 時半より理研講堂にて輪講會開催。用書 Strindberg: La konscienco riproĉas. その第 1 回を 11 月 9 日開く。8 名參加。前帝大理學部教授現理研所員淸水武雄氏も參加のはず。(MT)

★慶大エス聯合會——慶大エスペラント聯合懇親會は日吉エス會の司會により醫學部三田會員先輩 12 名出席。 11 月 26 日澁谷東橫グリルに於て開催。各部サルートあり、今次大會の模樣を中心に談笑、9 時散會。其の後有志集ひ 11 時頃迄バビラードに時の去るのを知らなかつた。次回は四谷司會卒業會員のアディアウア・クンシードとする事に決定。

（松尾）

★慶應エス會——講習會 日吉支部（豫科）では 10 月上旬より初等講習を持つた。受講者 5 名、週 2 回、短期講習用書を使用。11 月に會誌アミケーツオ 25 号を發行。

展覽會 11 月 7 日（日）豫科祭の文化展覽會に參加した。レヴーオ所載の代議士と文士のエスペラントに對する贊否を表示し、又世界地圖によつて各國の UEA•IEL の會員合計數を現し、各國觀光案內書とテープに依りつないだ。其他繪葉書書籍雜誌を陳列したが、文法の概略を揭げれば尙良かつたと思ふ。入場者は多いとは言へなかつたが、豫期の効果は舉げたと思ふ。S-ano 田畑喜作氏が見えられたのは嬉しかつた。當日會場內で國際語が必要か否かを投票して貰つて肯定 7/8 を得た。終りに學會が種々の便宜を圖つて下さつた事を感謝する。（小澤）

★醫學部エス會——11 月 24 日午後 3 時半より、信濃町病院本館屋上喫茶店に於て例會を開催、望月教授、川上助教授 宮城氏、學生 4 名出席、大會の模樣をネチエスタントウイに紹介後、會話會を行ひ 6 時散會。

松尾）

盛岡

★盛岡エス會——10 月 3 日、佐藤忠孝氏商用のため突然滿洲に向けて出發。暫く滯在の由。例會は每水曜日、基礎讀本を中心として專ら會話の練習。初等文法講習組は婦人だけ每金曜日、安本氏宅で賑やかに勉强中。50 周年記念大會に 3 人位は參加出來る積りでゐたところ 1 人は應召、1 人は勤務先の都合で機を逸し止むを得ず、在京 MER-anoj 4 人に萬事を託すことに決定。

青森

★青森エス會——10 月 3 日本縣に於ける最古參格の學會會員七戶町の同志市ノ渡氏が縣病に入院されしを御見舞し快癒を待つてエス運動のために再起されんことを語り合つた。 ◇會合——遠足會。10 月 16 日八甲田山腹酸湯溫泉へ 5 名。會話會。10 月 25 日 5 名。11 月 5 日 6 名。最初の行事としての家庭訪問を葛西（兄弟）、北川孃、齋藤（兩氏）5 名にて郊外に內山（姉妹）宅へエスペラントでなくては享け得られぬ親睦の Verda atmosfero 一色。◇研究會——齋藤氏中心の Analiza Historio は一月にして讀破 Sovaĝa Kamĉatko へ。Fabeloj を旣に終つた內山（姉妹）は揃つて有島: Deklaracio の研究。例會の宣傳で勉强に參加された新人成田俊逸、西田一義、富樫良造諸氏。 葛西（弟）氏の一年に餘る說得の熱烈さに日本キリスト教會牧師中山氏は遂に理解され愈々研究に着手されることになつた。又 氏縣社會課に轉ずるや事變銃後事業の本據たる同課內はこぞつてエス語を支持するに至り旣に 10 月 25 日より水野女史、林崎、小野、晴山の諸氏は短講書を手に課內にて熱心に講義を受けてゐる。尙縣社會事業協會發行の月報には編輯者水野女史の懇ひに依りエス語狀を載せたり。同誌は縣內は勿論全國社會事業團體へ配布される由。 ◇月例會——11 月 15 日躍進途上にある青森エス會、例會には期せずして集る者 20 名を越え、婦人ロンド始めての司會のもとに秋元、北川兩氏の Bonaranĝo に依つて monologo, kantoj 研究發表等々活潑に進

行され殊に齋藤氏の traduko（芥川：くもの糸）神氏の文法研究はよかつた。特に葛西（弟）氏に從つて米人H.G.ノツス先生が吾等のよき理解者として例會に參加親しく歡談されたことは特筆に價する。尙例會半ばにして軍服の同志佐々木滋氏が偶然會場立看板を見て出席されたことは皆を喜ばして吳れた。同氏は浦和より東北帝大に學び仙臺エス會に於て活躍されたとか、當分當地聯隊に留まる見込で出來るだけ吾等を訪ねられると約された


青森エス會

名古屋

★名古屋エス會——◇每週月曜日19時半より2時間宛中區鐵砲町2丁目白木氏方で輪讀會を續けてゐる、用書はZ讀本第一卷、最近の出席者は竹中、高松、內藤、白木、丹羽、田中、眞山、村上の諸氏。◇10月20日 Ora Delfeno 36號を發行。

大阪

★大阪エス會——11月7日豫告通り Sezona Pikniko por la lasta somera gekursanoj を決行。前日迄續いた惡天候は、當日カラリと晴渡り氣溫殊の外暖く終日氣持よく郊外の新鮮な空氣と紫外線を滿喫した。殊に Ŝindo 氏の Bona gvido によつて隨時隨所に Esp. Kantojn を聲高らかに獨習合唱し和やかなフンイキをタダヨワスことができた。Piedira Kurso：大阪梅田→山崎下車→寶寺→天王山→柳谷觀音→長岡天神→大阪梅田→解散、Aliĝintoj：17人。——中等講習會：初等講習者諸氏の熱望にも拘はらず會場をうることの困難なため遺憾乍ら未だ開催不能。——例會：東市民館が今事變のため同關係の事業に提供されるため當分借用し得る見込立たず、專ら心齋橋筋平野町南入西側“Trapezo”（平岡コーヒー店）にて會話練習を行ふ。

★O.S.E. 豫告——每火曜日午後7時→9時迄上記“Trapezo”にて輪讀研究例會、テイスト Edmondo Private “Historio de Esp'” 使用。——O.E.S. Komuna vespermanĝo：11月30日（火）午後6時半から北濱2丁目野村ビル5階如水會食堂にて。會費70錢。大會出席者の報告感想雜談其他。——O.E.S. Sezona Pikniko：Dato 12月5日（日）、Piedira kurso 南海高野沿線狹山寺池ハイキングコース、kolektiĝejo ナンバ驛改札口前、kost 65錢。—— Zamenhota Festo：12月15日（水）午後6時半から心齋橋筋戎橋北へ半丁東側、明治製菓喫茶店3階、會費80錢。當日は恒例のプログラーモの中に、サキニ「ポーランドに於ける世界大會に日本代表として參加歸途エウローポを巡つて來られた京都の同志中原氏を迎えて愉快な且有益な視察感想談を加へる豫定。京阪神多數同志の參加を希望す（會場準備の都合のため出席希望者は北區東梅田町プリミヤハウス內 O.E.S. 宛通知を希ふ。）


大阪エス會

大牟田

★大牟田エス會——大牟田エスペラント會長植田半次氏長男凡郎君は今回の事變に軍醫として充員召集を受けられた。我々會員も多數驛頭に同氏の出征を華々しく送つた。愛國の士である同會長は長男出征に際して出征祝も心ばかりに止め賑々しくせずしてその冗費を省き金一封を當市役所を通じ皇軍慰問金として寄附された。我々は同志植田凡郎君のために武運長久を祈るものである。（西原）

大連

★大連エス會——例會每週火曜19時より目下〃スラブ篇〃輪讀。場所。聖德街4丁目59番地。シズカ醫院（宗禹憲氏宅）電9835。大連、伊勢町に軒を並べたる屋臺立食店の中央程に〃Varma kafo aldo ni kuko〃なるビラを下げたる店を現す。數年前電園圖書館の講習にも出席せられたる古き同志井上氏の經營になる由。豚カツ、燒鳥

も有り專ら井上夫人が店に居られる。散步の節 varma kafo を召上るも一興。

豫告 ザ祭は 12 月 15 日(水) 18 時半滿鐵社員倶樂部第一集會室にて開催。五十周年記念講演。″Al la fratoj″ のレコード演奏。其他。會費 50 錢。大連エス會事務所、大連市聖德街四丁目 59 スズカ醫院内(南滿保養院石崎分一)

奉天 ★奉天エス會——10 月 21 日(木) 19 時 30 分より、奉天紅葉町 3 番地に新築された D-ro A. Abe の書齋で久々の集りを開いた。其夜集つた者、四平街滿鐵建設事務所の奉天移轉に伴い居所を奉天に移した S-ro Alima S-roj Obana, Iô Kitao, Sai, Mineŝita それに D-ro Abe を加えて 7 名。尙出席を約されながら來客とかで S-ro Otani の見えなかつたことは殘念だつた。久々の集りで次々と話がはずみ、事變とエスペラントの話、最近學會關係の方々の中で渡滿された人がゐる筈だがそれらの人々の住所氏名を學會ではわかつてる筈だからその地方のエス會に知らしてくれてもよささうだとの學會に對する Peto を表はした樣な話。今は講習會をやる樣な時期でないから舊會員だけで研究して内容を充實させよとの話などで 23 時すぎまで話がつきなかつた。結果、每週木曜日 19 時半から Domo de D-ro Abe を kunsidejo にして Georgo Dandin の研究會話の練習をやることにきまつた。

新聞雜誌とエス

★動物學雜誌(49 卷 10 号 12 年 10 月号)——石宙明:再び朝鮮產モンシロテフの變異研究 (Seok, D. M.: Ankoraŭfoje pri la Virieco de Pieris rapae Linné de Koreujo)

★植物及動物(5 卷 10 号 12 年 10 月号) 佐藤隼夫:女川灣の螠、星虫、鰓曳虫 (H. Satô: Raporto pri la Echiuroidea, Sipunculoidea kaj Priapulóidea en la golfo de Onagawa)

★教學新聞(12 年 11 月 21 日)——時節柄注目すべきエスペラント大會、英語排擊と暹羅への友好メッセージを贈る」—— 大會に關する記事の掲載あり。

★中外日報(12 年 11 月 21 日)——五十周年を記念し日本S語學會けふから廿五回大會」——大會記事。

★北國新聞(12 年 11 月 17 日)——エス語大會で支那のデマ粉碎、帝國の態度を闡明金澤支部吉川氏出席。

★大阪朝日(石川版)(12 年 11 月 10日)——エスペラントで支那のデマ擊破、東京の第 25 回大會に瀬川教授が提案——記事。

★十勝每日新聞(12 年 10 月 23 日)——言語の文化的意義——佐藤松男

★大日本新聞(12 年 10 月 24 日)——日本の立場を國際語で全世界へエス語同盟が海外宣傳 — 記事。

★大阪朝日(石川版)(12 年 11 月 16 日)——エスペラントで正しい日本を宣傳、佛國スーダ・クルツエートの皮肉へ、敢然起つた竹内藤吉さん」——記事。

★東奥日報(12 年 11 月 20 日)——エスペラント現狀に就いて——葛西藤三郎。

★中央新聞(12 年 10 月 27 日)。東京朝日(12 年 10 月 25 日)。東京日日(12 年 10 月 27 日)—— エスペラント歌曲の當選者記事。

★東奥日報(12 年 10 月 15 日)——青森エス語會記念座談會——記事。

★婦人公論(12 月號)——ザメンホフ傳——子供のための偉人傳、黑板勝美。非常に貴重な寫眞も加へられてあり、ザ博士の生ひ立ちから、世界大戰中に最後の息を引きとるまでのが描かれてある。啓蒙的な意味をもつこの傳記は、これ迄エスペラントに就いて、從つて、その作者について極く僅かの知識さへももつてゐない人々に異常な興味をよび起すであらう。

★東京每日(12 年 10 月 23 日)——「エスペラント語で世界に呼びかける正義日本を認識せよ」——記事。

地方會機關紙その他

★Forta Voko(北陸エス聯盟) Julio, Aŭguto N-ro 18. 謄寫 8 頁。初學者と國際通信——木下保、村のおとめ——角尾芳風譯。N-ro. 謄寫 10 頁。Mia Sperto kiel Angllingva Instruisto——Sugano, Vivo de A. Q., Tinka Rondo 報告、村のおとめ——Migranto 譯。

★La Fervojisto(鐵道聯盟) Nov. N-ro 73. 活版 16 頁。大會豫告。濃霧の中に秋を探る——Momêjo, Terminaro de Fervojaj Veturiloj (21) 聯盟名簿。

★H. E. L. (Hokusei Esp-ista Ligo. 三重縣)

☆ 街 の 話 ☆

★東京朝日（12 年 10 月 19 日）——駐日暹羅公使のミトラカーム・ラクサ氏は今度歸國する事となつたので日外務省を訪れ廣田外相をはじめ河相情報部長や前駐暹公使の石射東亞局長等を歷訪して歸國の挨拶を述べた後支那事變についてラクサ公使所感を洩らして『今日の事變に鑑みて、是非とも東洋各國の共通語を設ける必要が痛感される、いはば東洋エスペラントをつくる事だがそれには東洋各國語中もつとも言葉の簡單な馬來語のやうなのを用ふるのがいゝ。各國とも國語がそれぞれあるのはいゝが今日のやうに東洋の共通語として英語を用ゐてゐるのは東洋の恥辱だ」とばかり滔々と辯じ立てたので外相はじめ各幹部は公使の親日的誠意に感激して別れを惜しんだ

★大會で歌はれた當選歌曲 «Al la fratoj» 及び «Kanto de l'ligo» 共にレコードに吹込まれて大へん好評であるがその樂譜が同志印刷者の犧牲的努力に依て美麗に出來上り大々以來續々申込がある。殘部僅少につき此際至急御求め下さい。各一部十錢。

★本誌十一月號發表 I. U. 氏の詩 «Jubilea Readmono» を同志佐藤恒子孃が作曲したが時期切迫のため大會に間に合はず十二月十五日の Z 祭もピアノの設備なきため十二日に銀座小野ピアノでロンドハルモニーアの本年度最終回に於て作曲者自身の伴奏で歌はれ學會側からも出席者あり非公式ながら發表された。これは本誌本號に掲載した。Al la fratoj に次いで早くも斯樣な大作が終始 esp-isto の手に依て完成されたことは Jubileo の好箇の記念として喜びに堪えない。

N-ro 3. 謄寫版 106 頁。Virino en Havenurbo—Hukuta, Poemeto—T. K., Skribaĵoj—Matsumoto, El Mia Vivo—Onisi, Detektivo Verda Frato de Pinokjo Signo de Aerveturilo—Kobayasi, Brua-Strato—Kasai, Muziko k. Vivo--Matuoka, Frato Akira—Higuĉi, Sonĝo de la Patrino—G. Os, Nebulo—Polusa Stelo, La Dua Kiso—Yosioka, Kamparaj Kuracistoj—G.—J., Kio estas Malsaĝo—Kampulo, Poemetoj: Toĉjo, Honto—Goto, Deveno de la Sibiliso—Goi.

★Orienta Kulturo（東洋文史研究所）Nov. N-ro 5. 活版 16 頁。Parolado de ĉefministro Princo A. Konoe rilate al Ĉina Afero, Japana Ekspedicio al Ĉinujo—Cujuki, Historieto de Japana Ŝintoismo III—Fukuda, Skizo sur Aina Literaturo III—Igaraŝi.

個 人 消 息

★竹中治助氏（名古屋）11 月 2 日名古屋若宮八幡社にて御結婚擧式。

★下村芳司氏（名古屋）10 月初旬名古屋市中村區横堀町 2 丁目の株式會社誠工社（本社）に鹿兒島より御轉勤。

編 輯 後 記

本誌の編輯委員としての吾々の仕事は、本月號を以つて終りを告げた。

卽ち本年 5月から 12月までの 8 冊が、吾々の手に依つて仕上げられ、そして皆樣の御手許へ送くられた。

吾々は、吾々の小さな努力と就中數人の先輩達の親切に因つて、大なる誤りを起さず其の任を果すことを得た。

だが勿論吾々の仕上げて來た結果は、當然に、凡ゆる種類の批判に堪ふるものではなかつた。

吾々は、當初より編輯に對して凡ゆる種類の批判に堪ふる如き新らたなる方針をを樹てることをしなかつた。隨つて吾々の任務乃至目的は、唯々既定の方針に準じて其の傳統を踏襲するといふ極めて消極的なものであつた。

斯くて吾々は、大なる誤謬を惹き起すことなく其の任務を遂行し、目的にまで到達した。

而して斯の事は、我が學會當事者達の從來の方針の正當なりし事實を改めて確實ならしめることに貢獻した。

だから吾々の仕事の結果がラレヴオオリエンタとエスペラントレルナントと 抱合への

遂行を誘掖するものである筈もなかつた。

さて、それならばその合併なる事實は、何に依つて説明さるべきものであらう？

それは全く新らたなる一つの試みとして認識さるべきものであり、又一面その不足せる勞働力——一應の意味で——を斯かる形態に據つて或る程度緩和し得るであらうことを目的したであらう、他面學會 financo をヨリ上向けんとする一つの努力として、理解さるべきものであらう。

兎も角もこの計畫の成功的遂行は、皆樣の絶へざる、飽くまでも容赦なき徹底的な批判と、皆樣及び皆樣の周圍の多くの未知の大衆諸氏による大衆的支持によつてのみ齎らされ得るであらう。

斯くて、この新らたなる方針が吾々の運動の些さかの後退をも意味するものでなかつたことを證明し得るものとなるであらう。

次に私は、吾々の仕上げた 8册に筆を執られた全部の方々に、厚く御禮を申述べ度く存じます。

殊に色々の事情で一般から多く得られなかつた研究記事乃至エス文記事を、發行日に差し迫つてその執筆を御願ひすること屢々に及んだ、私にとり恩師岡本好次先生に深く感謝の意を表し度いと存じます。

また、我が R. O. 編輯部に絶へず御聲援賜はつた小坂狷二先生、川崎直一先生並びに三宅史平先生に厚く御禮を申述べ度く存じます。

なほ、編輯委員の一人として、終始私に對し親切に御共働下さつた先輩久保貞次郎氏に深く感謝の意を表し度いと存じます。

最後に私は、本誌の發行が殆んど毎號のやうに遲くれたことを、吾々の編輯活動の弛緩を何時も斯かる形態で暴露してゐたことを、甚だ遺憾とし、同志諸氏に對し申譯ないことゝ思つてをります。だがその原因の多くが全く不可避の事情——例へば、編輯委員の中で病氣になられた方があつたことや、東京から他へ轉任になられた方があつたことや、御勤め先の方の仕事が甚だしく多忙になられた方があつたこと——に因るものであつたことを記して、改めて御許しを得たいとおもふひます。 （酒井 鼎）

★Revuo Orienta と「エスペラント」が 1938 年度から合併します。これは今年の 8 月の理事評議員會で内定したことでありますが大會でも小坂、三石兩理事から報告がありました。事情は本號の卷頭に小坂氏が説明されてをる通りであります。時局非常の折エスペラント運動も大いに冗費を節約し、最高の能率を上げるためにも、Revuo と「エスペラント」を合併することが有利です。卽ち合併によつて二つの雜誌を出す費用が一つで濟みますし、又岡本書記長が退職された後は、學會の勞力も不足勝なのでこの際合併により、私達 Revuo の編輯に携つてゐた者が、新しい "Revuo Orienta" に助力し、そのため三宅氏も新しい "エスペラント" の編輯勞力が減ぜられませう。三宅氏や私達が合併によつて得た energio, 時間は出來るだけ學會としてなすべき他の仕事、例へば單行本の發行等にふり向けられるべきです。そうしてこそ、この合併が意義を増すわけです。

★今年の 3 月まで書記長の職にあつた岡本氏が、本誌の編輯一切をやつてをられたのが急に京城の方へ行かれることになりましたことは、同志諸君の御承知の通りです。岡本氏が學會を去られた後、本誌の編輯は評議員の手によつて遂行され得るだらうといふ豫測はありました。しかし實際になつてみると、4 月 10 日に私達の期待をかけてゐた大木克巳氏が、突然ハルビンに赴かれ 14日の朝には、これ又約二ケ年最も獻身的に學會の仕事を助けられた原田氏が病を得て北海道へ去つて了ふといふ狀態に立ち到つたのです。

★そこで評議員會が開かれ、露木、青木、渡部、酒井、久保の 5 人が編輯を分擔して引受けました。5, 6, 7 位までは月二回の編輯會議もどうにか開かれましたが、私などは餘り勤勉ではありませんでした。その中、9 月になりますと渡部氏が東京を離れて就職多忙になり、露木氏もお勤めの方が忙しい上に、過勞で健康がすぐれないので、私達の方から充分靜養をすることをおすゝめし、青木氏は公務多忙で、9月號の如きは目を患つた酒井氏が一人で、校了の赤ペンを握るやうな狀態でありました。10, 11, 12月號は酒井氏と私と二人でどうにかやつて來ました。そしてこれが私達の編輯する最後の Revuo Orienta です。

★來年からは三宅氏が責任輯編者となつて私達はその helanto になります。

★光輝ある Revuo Orienta の編輯に暫くの間とは云へ從事したことは私達の光榮だと

成田良子孃を悼む

大會が終つて、ひといきついたとき、成田良子孃のなくなつた知らせを受取つた。成田孃は、4月まで、學會で勤いてゐた事務員である。毎月、10日から13日くらゐのあひだに、ひまをみて、病院へ見まひに行くことにしてゐたのが、11月は、大會の準備のため、行けなかつた、その13日のことであつたといふ。24歳であつた。

おととしの4月から勤め、去年の1月にいちど退いて、おなじ4月から、ふたたび働いてゐた。

美しく、まじめで、勝氣で、それでゐて、しとやかな、そして、悧巧な、それらの性格の、よい半面だけを活かして、よく働く人であつた。頭も、女にはめづらしく、事務的に働いた。

有給の女事務員を、はじめて入れたのが、昭和9年7月。新聞廣告で來た、最初の人、五十嵐つる子孃が、すばらしくすぐれた人であつたので、わかい女事務員に多くを期待したわれわれは、その人が、あくる年4月、病氣で急に退いたとき(去年、たうとうなくなつたとのこと)、まつたくまごついた。

新聞廣告であつまつた數十人のなかから選りすぐつた候補者4人、どれも役に立たなくて、廣告をしなほし、こんど第一に採用したのが成田孃であつた。この人が、去年の1月、病氣で退いたときも、4月までのあひだに、5人くらゐ變つた。さうかうするうち、この人が全快したので、また來ていただいたのであつた。

また病氣でもされては困る、無理をしないやうにと、やかましく言つてゐたが、もちまへの勝氣と、そして、われわれの esperantisteco に對する理解とから、時間外まで働くことがしばしばあつた。

もともと、あまり丈夫でないからだに、それらの無理が積つたせいもあらうか、この4月急にわるくなり、學會を退いて、療養所にはいつた。そしてそこで若い生命を終へたのであつた。

勤めながら、學會の講習會に加はり、エスペラントを學んだ。技術的には、まだ、esperantistino といふほどにはゆかなかつたかも知れない。しかし、單なる勤め以上の、仕事に對するまじめさから言つて、精神的に、1人の無名戰士として、その靈には花束が捧げられるべきである。 (M.-Ŝ.)

思ひます。しかし乍ら不充分な編輯で同志諸君の期待に添ひ得なかつたこと數多いことを認めます。

★歷史的な年1937年を終へ、38年を迎へます。私達は、エスペラントをあくまでも離さずに、この國際語文化の擴充に努めませう。一つの大きな建築物には優れた設計が必要であり、又一方現場で一枚の板をけづり、一本の釘を打つ一人一人の職人の小さな勞力が積り積つて始めて完成されます。その忍耐力は蟻や蜜蜂の孜々として働くのにも似て、たゆむところがありません。私達もよい運動の方針、根本を設計すると同時に毎日の、一歩一歩の小さな建設の仕事にあきるやうなことがあつてはならないと思ひます。

各地同志の御奮闘を祈ります。(久保)

LA REVUO ORIENTA
Jarkolekto 1937

總目次 ENHAVO